國語研究會編纂

# 修訂中等國語讀本字解

第四學年用

國語研究會編纂

修訂

# 中等國語讀本字解

第四學年用

明治
45. 6. 3
内交

修訂

# 中等國語讀本字解卷七目次


一　忠信の義……一
二　今上天皇御製……九
三　花の譜……一二
四　振天府拜觀記……一六
五　聖駕の凱旋を賀し奉る……一九
六　北京の光景を報ず……二四
七　宇治河の先陣（その一）……二七
八　宇治河の先陣（その二）……三五
九　平家雜感……四二
一〇　山時鳥……五三
一一　十八樓の記……五四
一二　筍あらそひ……五五
一三　丈夫の志……五六
一四　自警……五九
一五　白石と宣長……六〇
一六　門を造る說……六六
一七　そぞろごと……六八

一八 熊野落……七二
一九 舊都の月……七九
二〇 月夜逗子より友人に寄す……八一
二二 荒野の末……八五
二三 故郷（その一）……八六
二三 故郷（その二）……八九
二四 諷諭……九三
二五 國民の抱負（その一）……九五
二六 國民の抱負（その二）……九八

修訂中等國語讀本字解卷七目次（終）





## 一 忠信の義

【孔門】孔子の門人の義。孔子名は丘、字は仲尼、魯の人なり。昭公の十三年季氏の吏となり、翌年司獄の吏となり、定公の十年大司寇となり、十三年魯を去り、哀公の十一年魯に歸り、十六年卒す。弟子三千人。身六藝に通ずるもの七十二人なりきと云ふ。

【顏子】名は回、字は子淵、孔子の弟子なり。天資明睿、一を聞いて十を知る。亞聖の稱あり。十哲の首に居る。三十二にして卒す。

【閔子騫】ビンシケン 名は損、字は子騫、德行を以てあらはる、十哲の一人なり。

【仲弓】名は雍、字は冉、德行を以て

あらはる。十哲の一人なり。

【有子】名は若、字は子有、魯人なり。

【曾子】名は參、字は子輿、十哲人の一人なり。志孝道に存す。故に孔子之に因りて孝經を作る。蹝履篤實一貫の旨を悟り、道統の傳を得たり。

【工夫】クフウ 品性の修養に心を用ゐること。

【切實】セッジツ ねんごろにして實際にかなへること。

【吾日三省吾身】三たびとは只しばしばするを云なり。三度と限りて云へるにはあらず。省は察なり。心に思ひ、事に行ひたる端について善惡是非をかんがふるを云ふ。

【爲人謀而不忠乎】忠は心の底をつくしてのこすところなきを云ふなり。人の爲に事を謀りて、吾が爲めに謀るが如くするは心底をつくすなり。いまだかくの如くに忠ならざるところなきかと身に省察を加ふるなり。

【與朋友交而不信乎】朋友とは同門もしくは同志の人を云ふ。信は言を實にして相欺かざるを云ふなり。

【傳而不習乎】傳は師に受くるを云ふ。習とは已に熟するなり、業をうけて習熟せざれば、師に對して敎を空しくするなり故に省るなり。

【猛省】マウセイ 精神をふるひおこして反省すること。

【魯鈍】ロドン のろくにぶきこと。

【親炙】シンシャ 親近してこれに薰炙せらるゝなり。(薰はやくなり。炙はあぶるなり。故に人に親近して、自然の感化を受くる義に用ゐるなり。)

【亞聖】アセイ 亞は次なり。聖人に次ぐ大賢人の義なり。

【簡約】カンヤク かんたんにして、つゞまやかなること。

【近切】キンセツ てぢかくして身に適切なること。

【千古の確言】千古の確言は未來の末に至るまで、動かざるたしかなことば。

【體認】タイニン 自分の身にしたしく

ひきあてゝ、のみこむこと。
【約言】つゞめていふ。
【折言】わかちていふ。
【盡レ己】おのれの心底を人につくすこと。
【以レ實】言行がその實にたがはざるやうにする。
【伊川程頤】程頤字は正叔、伊川と號す。宋人にして、程顥の弟なり。哲宗に仕へて崇政殿説書に至る。
【適切】テキセツ てつきりとあてはまること。

【明道程顥】字は伯淳、明道は其の號なり。仁宗に仕へ鄠上元主簿、晉城令に歴任し、專ら德化を尚ぶ。
【發レ己自盡】自分の赤心を披瀝して、心底をつくすと云ふなり。
【循レ物無レ違】種々の出來事に遭遇して、言ふ所行ふ所其の實に反することなきを云ふ。
【天の道】人爲のものにあらずして自然の道だといふこと。
【隨神の道】自然の命ずる所に從ふ道といふ意。



【義を盡す】正しきすぢみちをつくす
【不臣】フシン 臣たる道にそむくこと。
【身を致し】身をさしだしてまかせる意。
【本意】本來の意義といふこと。
【明晰】メイセキ 晰も明なり。はつきりとしたること。
【漢の高祖】名は劉邦沛の人なり。項羽を亡して天子となる。
【鴻溝の境を出でず】項王漢と約し、天下を中分して鴻溝以西の者をさきて漢となし、鴻溝以東を楚となさんとせしを云ふ。
【後漢の昭烈】劉備を云ふ。
【蜀を取らずば】劉備始め劉璋と結び後龐統の謀を用ゐ巴より蜀に入り劉璋を襲ひて成都に入り自立して漢中の王となりしを云ふなり。
【匹夫】ヒップ 身分ひくきたゞの人。
【おのれに體し】己の身にひきあてゝ行ふ。
【慈養生息】いきとしいけるものを

いつくしみやしなふこと。

【所を得る】各その業にやすんじてその職をたのしむこと。

【敕諭】チョクユ みことのり。

【表裏支吾】支吾は相さゝふると云ふ意義にして、表裏の一致協合(ケフガフ)せざるを云ふ。

【成憲】セイケン 成文の國法。

【前哲】ゼンテツ 昔の賢者。

【傳誦(ヂンショウ)】つたへ誦す。

【省察(セイサツ)力行】物事をかへりみさつして、つとめおこなふ。

【後宮】コウキウ おおくごてん。

【いにしへの文見るの御製】いにしへの書物を見るたびごとに、古聖賢哲の國を治むる狀態を察し、自分の治めて居るこの日本國は古の人に對して遜るところなきか如何にと、いつでも思ひ出さないことはない。いつも思ふことじやとの聖旨なり。

【聖躬】セイキユウ 天子の御身御みづから。

【聖心】おほみごゝろ。



【存養】ソンヤウ たもちやしなふ。

【擴充】クワクジウ おしひろめて缺陷なきやうにするをいふ。

【唐虞三代】堯、舜時代、及び夏、殷、周の三代の稱。

【臥す龍の御製】龍は靈物にして起てば必ずなすところあるものなれば、臥す龍とは英雄の未だ世に用ゐられずして、民間に居て世にあらはれざるを云ふなり。歌の意は世に未だ用ゐられざる英雄の居る岡の上の雪をふみわけつゝ、英雄の臥すてふ草の庵を訪ねて來て、王者の師たらしめんとせしものは、そも〳〵誰れであらうかとあそばされしなり。

【心の切(セツ)なる】まこゝろのふかきをいふ。

【言外に靄然(アイゼン)たり】御製のお言葉のほかに十分みえてをるといふこと。

【姜后】キャウコウ 周の宣王の后なり。

【身をつみてのお歌】おのれの身をかざれるさま〳〵の花をつみとりて、ちらしすつるにあらざれば、旭

日の光も、空にぱつと威勢よくうつり輝くことはあるまい。されば日の本の國の光を、外つ國の上にかゞやかさんと欲せば、まづわがみの粧飾をとりさつて、儉素自ら率ゐることが國力を養ふに最も主要の事たるべしとの意なり。

【かへりみての御歌】おのれの心にかへりみて自問自答しで見たならば、自然と是非善惡の道も明になるべきを、などてこのたゞしき道にふみまよひて、みづから心をくるしむるのであらうぞとの叡旨なるべし。

【關々和樂】クワンワンクワラク　關々は詩經の語なり。「關々唯鳩(ショキウ)在ニ河之洲。」とあり。關々は鳥の雌雄こたへて聲のやはらげるを云ふ。唯鳩は水鳥の名。此の鳥雌雄のつがひ定りて相みだれず。つねにあそべども亦隔りて相なれず。人そのむつれむらがりたるを見ずと云ふことにて、彼の唯鳩の關々としてみだれず、相和らげるが如くましますを云ふ。

【相懋(ツト)め】心を政務の上におかせられて、儉素自らひきゐたまふをいふ。

【叨に德旨を摘(テキ)發(ハツ)す】さしでがましくも、聖德のましますところをとりいたしてあらはすと云ふ義なり。

【宏度】クワウド　度量のひろきこと。

## 二　今上天皇御製

【つかさ人の御製】百官のさしあぐる政務の上に關する文書は多くあれども、一々これを裁斷するの間にも、花鳥風月をたのしむの餘暇はあるぞとなり。忙中おのづから閑あらせたまへる陛下の御襟度、欽仰すべきことにこそ。

【としゝにの御製】毎年々々夏が來ると、山の泉など汲みて避暑せばやと思はぬ年はなれども、政務の忙しさにいまだ思をとゞべき夏はないとなり。大御心を政務の上にそゝがせられて民の上を思はせ

給ふの御心のあつき、ありがたしともかしこしや。

【園もりやの御製】むかしわがあつめておいた秋草は、今をさかりとさきみだるゝことならんが、政務に忙しければそれさへ見る暇もない。さだめし園守る園丁のみが見ることであらうとの聖慮なり。

【しづが屋の御製】民家の軒さきに、高くつみあげたる新しきわらの上に、霜が眞白に凝結して居るよ寒さになやむ民もあるべしとなり。

【あざみとりの御製】うす綠なせる空のくまなくすみわたれる如き、宏大無邊なる心をもちたいものじやとなり。

【積りてはの御製】塵埃(チリホコリ)ほどの事じやと思つて油斷をして居るけれども、いつのまにか積り累(カサナ)りて、掃ひがたきまでになるものじや。されば何事によらず、些事なりとて心にもとめず、拋擲(ハウチヤク)してはならぬぞとの聖慮なり。

【こゝろあるの御製】思慮深き人の忠言は、病なき人々の藥となりて、身を益すること深ければ、きゝいるべきことぞとのたまはせたまへるなり。

【たらちねの御製】兩親のいましめたまふ家庭の教訓はせまいけれども、それがやがてひろき世上にたつ基礎となるべきものなれば、家庭の教育はゆるがせにしてはならぬぞとなり。

【よもの海の御製】四海皆兄弟なりと思ひなせる世の中になぜて波風を起して干戈に訴ふるが如きことのあるのであらうぞとなり。陛下の平和をのぞませたまふことかくの如し。此歌よまん外つ國人の感や如何に。

【神がきにの御製】衆庶の參拜せる中に、神社の社殿になみだをたむけて、拜んで居るらしいものか見ゆるよ。あの中には我が父、我が夫の凱旋をまつて居つた妻子もあるであらうに。いたはしのことよとなり。

【とこしへにの御製】塵末來の後までも民やすかれと祈れる我が心を諒として、我が皇祖太神宮も我が世を守らせたまへとなり。

## 三　花の譜

【荒磯の隈】あら波のうちよする磯邊の、おくまりたるところ。

【ゆかしき方】おくゆかしい方。

【衡門】一本の笠木をわたして造れる門。(かぶきもん。)

【いぶせく】むさくるしい。



【心に飽かぬ】心にまんぞくしない。(いやにおもふ)

【をかし】おもむき多し。(面白し)

【俗に移されず】風習に感化せられぬこと。

【俗を易ふ】土地に感化をあたへて、風習を移しかふるをいふ。

【出師の表】表は君に奉る書狀のことなり。蜀漢の丞相諸葛亮、漢の天下の恢復をはかりて、兵を魏に出さんとせしとき、後主劉禪に上りし表なり。安子順曰く、「讀二諸葛武侯出師表一、不レ墮レ淚者、其人必不忠、讀二李令伯陳情表一、不レ墮レ淚者、其人必不孝、讀二韓文公祭十二郎文一、不レ墮レ淚者、者、其人必不友。」と本文の意はこの語によれるなり。

【雪と潔くなりて】雪の如くに潔白になる。

【氣質の偏りたる人】心だての偏屈なる人。

【道に進む】道義心にあつくなること。

【心ざま】心のありさま。(心底。)

【位高く】品位高尚なること。

【遠くわたる】遠方にまでかをりゆく。

【巖桂】木犀のことなり。

【瑞香】沈丁花のこと。

【さし逼る】せつくるしい。(ひつこい。)

【媚ひ立てる】なまめかしきさま。

【見るを許して狎るゝを許さず】見るのは勝手に見しむれども、ちかよりて狎れ狎れしく云ひよるをゆ

るさない。

【風情】おもむき。(やうす。)

【儻(タグヒ)なく尊し】他の類例なくしてたつとい。

【立ち罩むる】立ちふさがつてをる。

【あこがれしむ】おもひこがれて、心をなやまさしむ。

【雲の峰】夏の空に雲たちて峰の如く見ゆるを云ふ。

【さわさわ】風などの物にふれて音たつるに云ふ語。

【機に先立ち】時機の到達せざるさきにの意。

【身を取りおき】身を退きて、事にたづさはらざること。

【變に臨み】不時の事變にさしかゝつて。

【悠々】イウイウ 心ゆるやかにして、いそがざる貌。

【身を任せ】身を托して自由にまかせる。

【茆】クキ 芙蕖の莖なり。

【趣(オモムキ)なからず】風韻がないではない風韻がある。



【かひなく】修養の未熟にして、わかわかしきこと。

【口惜し】なげかはしの意。

【厚朴】ホヽノキ 落葉喬木なり。幹の色青し、單なる牡丹に似たる花ひらく。

【塵寰】ジンクワン 俗地のこと。

【知らず顔】知らないふうつき。

【嘯(ウソブ)き立つ】そらうそぶいて立つ。

【天つ風】そらふく風。

【壓されず】壓倒せられざること。

【なかなかに】かへつて。

【めざまし】目もさめるばかりに立派なりの意。

【仙女の冠】仙人の冠。

【花の面影】はなのすがた。

【かうがうしく貴し】ものさびて何となくけだかくたつとい。

【ただ人】凡人。(通常の人を云ふ。)

【武帝】前漢の孝武帝のことにして、北は匈奴を伐ち、西は西南夷に通じ、東は朝鮮を、南は越を討ち、匈奴遠く遁れて、其地を郡縣とするなど、雄材大略の天子なり。

【太閤】豊臣秀吉のことなり。太閤は關白を其子にゆづりたる後の稱號なり。
【瞿麥】ナデシコ　石竹科の植物なり。
【獨言】ヒトリゴト　ひとりごとを云ふ。
【歌心】歌を思ふ心。

## 四　振天府拜觀記

【戰利品】戰爭にて分捕したる品物。
【かしこき叡慮】ありがたき天子のおぼしめし。
【御意匠】ゴイシヤウ　たくみなる御考案。



【結構】ケツコウ　つくりかた。
【宸襟】シンキン　天子のみこゝろ。
【扁額】ヘンガク　よこにながきがくめん。
【疎ならず】オロソカ　疎略にはせぬといふこと。
【聞え上げて】申し上ぐること。
【かうがしく】たうとくおごそかなるさま。
【砌下】セイカ　階のいしだゝみにしたるところ。
【四阿】アヅマヤ　屋根を四方にふきおろしたる質素なる小屋。
【世の常ならず】世上に普通あるべきものとちがふ。
【勾欄】コウラン　折れ曲りたる造り方のらんかん。
【防材】バウザイ　港の内に入るを防ぐ爲に設けたる材。
【ものし給ふ】作らせられたと云ふこと。
【目もくれ】目もくらくなる。
【胸塞り】ムネフサガリ　胸がつまる。
【長押】ナゲシ　鴨居の上に打ちたるもの。（ながおしの略。）
【とりとり】それぞれに。
【あざやか】はつきりと。
【いたまし】あはれなりの意。
【かしこしや】恐れ多きことだねー。
【目もあやなる袱紗】フクサ　みる目もきらめく程立派に見ゆるふくさ。（袱紗は小さきふろしきのことなり。）
【日本錦】ヤマトニシキ　我國にて出來たる錦。
【表裝】ヘウサウ　紙帛などを貼りて細工すること。

【遺烈】キレツ　のこれる功績。
【草むす屍をおぼしやり】兵士たちの原野にさらした屍に、くさの生ムすなるさまをあはれと思召やられて。
【目留り】目がとまつて他を見んとの心のせざること。
【心惹れ】心がひかされて他にうつらぬこと。
【ひが言】實際にたがひたること。（道理にあたらぬ事。）
【かけまくも畏き】言葉にかけて申しあげんも畏多しの意。
【櫛風沐雨】シツプウモクウ　風に髪をくしけづり、雨に體をあらふと云ふことにて、風雨をおかして勤勞すること。
【御勞】オンイタツキ　御勤勞といふこと。
【率先】ソツセン　人々のさきにたちて下をひきゐたまふこと。
【ひたすら】いちづに。（ひとむきに。）
【青人草の一本】人民をくさの生ひいづるにたとへていへるにて、國民の一人としての意なり。
【御垣の内】禁苑内にの意。
【餘榮】ヨエイ　死後のはえ。（死後の名譽。）
【庶人に知らせばや】一般人民に知らせたいものじや。
【雲居】クモヰ　雲の居る場所と云ふ意にて、禁裏をさしていふ語なり。

## 五　聖駕の凱旋を賀し奉る

【學習院】明治維新後、華族相謀り、其の子弟教育のため校舍を建て、天皇内帑金を、毎歳十五年間下賜せられ、十年十月落成、天皇皇后兩陛下臨御ましまして開校式をあげ、名を學習院と賜ふ十七年九月官内省より規則を達し、華族の子女に普通教育を施し、華族たるの德性を涵養するを以て目的とすと定められたり。
【允文允武】インブンインブ　文武の德まことに盛なりとの意。

【列聖】我國歷朝諸帝をいふ語。
【洪緒】コウチョ 大なる事業。
【中興の偉業】チウコウ ヰグウ 明治維新の際に於ける、盛に興る運にあたれるおほみわざと云ふ意。
【群品】グンピン 人民を云ふ。
【時雨の化】ジウ 教化のよろしきにかなふこと、草木發生の時に及んで膏雨のふるが如きをいふ。
【韓廷政を失ふ】明治廿七年五月、東學黨と稱する亂民蜂起し、朝鮮政府之を平ぐる能はず。援を清國に



乞ひ。清國天津條約を破りて、兵を朝鮮國に送りし事件を指す。
【清國忽ち盟を渝へ】カ 天津條約を無視して出兵せしを指す。
【拯難】ジョウナン 難をすくふこと。
【震怒】シンド 天子のはげしく怒りたまふに云ふ語。
【大本營】タイホンエイ 天皇の大纛の下におかる、最高の統帥部の稱なり。
【供御】キョウギョ 天子に供ふるものを云ふ。
【飲膳】インゼン めしあがるもの。(供御。)
【宵衣旰食】セウイカンショク 朝早くおきて衣をかへ、日くれて後に食膳に向はせたまふを云ふ。(天子の政務に勤勉せさせたまふにいふ語。)
【百僚有司】もろ〳〵の官吏を云ふ。
【奔走經營】かけまはつて、計畫をたてゝ事を成すを云ふ。
【皇謨】クワウボ 帝王の謀といふこと。
【贊襄】サンジャウ 贊は助、襄は成すなり。天子を助けて治を成すを云ふ。
【期す】心にあてにする。
【懷くものは撫し】したがひたよつてくるものは、なでやすんずる。
【恩威竝び行ふ】オンヰナラ 恩惠を加へて撫綏すると同時に、恩になれしめざるやうに、威嚴を立てゝ恐れしむること。
【天兵】官軍を云ふ。
【渝盟】ユメイ 約束ぞかへて破ること。
【地を獻し幣を納れ】遼東半島、臺灣澎湖島を割讓し、且償金二億兩を納るゝことゝなりしを云ふ。

【嬬和】カウワ 兩國相互に、隙なからしむるやうに、合議して和親を定むるをいふ。

【善隣】ゼンリン 隣國に交るによく道をつくすをいふ。

【舊誼】キウギ ふるきよしみ。

【版圖】ハント 一國の領域をいふ。(版は戸籍、圖は田地の廣狹なり。)

【光華】クワ ひかり。

【六合】天地四方。

【現御神】アキツミカミ 現在の神の義にして、主上をたつごひて申奉る語。



【明德】公明にして人道にかなひたる德行。

【威稜】ミキツ 天子の御威光。

【伊弉諾尊伊弉冊尊】イザナギ イザナミ 二柱の神共に國土を治めて、大八洲國を畫き成したまひし神なり。

【天の瓊矛】アマノメホコ 玉を以て飾れる矛。

【大八洲國を云々】オホヤシマグニ いざなぎいざなみの二神、高皇產靈神の命を奉じて天の浮橋に立ち、天の瓊矛をとりて、滄溟を探る。鋒滴凝り島となるとあり。

【日嗣の神璽】シンジ 皇位をつがせたまふ天子のみしるし。

【三韓】馬韓辨韓辰韓をいふ。

【藩】ハン 一區劃の地域の意にして、天子の籬となりて守るをいふ。

【肅愼】ミシハセ 今の黑龍江松花江地方なり。

【貢を徵し】テウ みつぎものをさし出さしむること。

【細矛千足】クハシホコチタリ 細矛は千の枕詞にして、千足は富み足るの義なれば、萬事に不足なき國の義なり。

【恢弘】クワイカウ 大にひろまること。

【千古に亙り】ワタ おほむかしに至るまでの意。

【報效】ホウカウ 國恩に報いて力をいたすなり。

【華冑】クワチウ 門閥高き家柄。(貴族の稱。)

【藩屏】ハンヘイ 四方の籬となりて、屏蔽するの義にとりて、諸侯の稱となる。

【丹誠】まこゝろ。

【聖駕】天子のみくるま。
【還幸】大本營より宮城にかへらせたまふをいふ。
【表】事緒を標著して、之れをして明白ならしめ、以て上に告ぐるをいふ。
【以聞】きこえあぐるの意。

## 六　北京の光景を報ず

【清里】六町一里の制にして、我が約五町五十一間に當る。

【消息】セウソク　文選の註に、「消は往なり、息は來なり。」とありて、書札の義となる、又動止の意にも用ゐる。
【畢竟】ヒツキャウ　つゞまり。
【宿次】シュクジ　やどり。（左傳に、凡そ師一宿を舍となし、再宿を信となし、信を過ぐるを次となすとあり。）
【贏け得】モウタ　もうかつた。
【遼】レウ　古略丹と稱し、唐末內蒙古の一部を酷し五代の末には、北は



女眞を征服し、西は回鶻（クヮイコク）、吐谷渾（トコクコン）を降し、東は渤海を滅しその威亞剌比亞にまで及べり。金起るに及びて亡さる。

【金】滿洲の東部に住せし靺鞨種族なり。肅愼、女眞、渤海等皆是なり。遼の衰ふるに乘じ、松花江の地を略し、遂に國を金と號し、宋を攻む。宋地を納れて和を約せしが、後元の起るに及んで亡されたり。

【元】蒙古の鐵木眞、漠北の地に起り附近の部落を略し、東征西討領土を擴げ、太宗の時金を亡し高麗を降し、更に拔都をして西征せしめ、歐洲の地に武力を用ゐ、中央亞細亞を略し、世祖忽必烈に至りて元と稱せり。世宗宋を亡し、遼東、蒙古、吐蕃、中國を併せて直領せり。

【明】始祖を朱元璋と號せり。元末騷亂に乘じて起り、金陵を根據とし、國號を明と號し、元の現帝を逐ひて帝位に卽き、北邊を平定し、西南諸國を併せて、統一の業をなしたり。後清朝のために滅さる。

【隋】楊氏始め北朝の魏、及び周に仕へしが、周の靜帝の時に至り禪を受け。後陳を亡し天下を一統せり。煬帝の時唐の爲に敗られ、恭帝に至りて、帝位を唐に讓る。

【唐の太宗】名は世民、高祖李淵の子なり。高祖隋の讓をうけて帝位に登るに及び、世民父を輔けて帝業をなさしめ、南征北伐漢族未曾有の隆盛を極めたり。

【經由】とほり過ぐること。

【燕國】周代の侯國にして、直隸省にあり。昭王の時樂毅を用ゐて國勢を張りしが、樂毅去るに及びて國勢再び衰え、後秦の爲に亡さる。

【風蕭々兮易水寒】燕の志士荊軻の作なり。易水は河の名。荊軻燕の太子丹のために、秦王を刺さんとし、發するに臨みて歌ひたる歌なり。意聞えたるが如し。

【一抹】イチマツ ひとなでしたほどのといふ意。

【翠黛】スヰタイ みどりのまゆずみ。

【綠甍】リヨクバウ みどりのいらか。

【堂堂】盛なる貌。(雄大なる貌)

【整々】正しくきまりよき貌。

【紫禁城】シキンジヤウ 皇城といふに同じ。紫は紫宮にして天帝の居。禁は天子の居ます所をいふ語。

【聯想】一の觀念を想起するとき、自然とこれに伴へる他の觀念の復起すること。(他につれて思ひ出す。)

【無垠】ムギン 垠は限に同じかぎりなしの意。

【塹壕】ザンガウ ほり。

【交民巷】カウミンカウ 外國人の居留地のことなり。

【公使館】公使の駐在して、事務を取扱ふ所。公使は派遣國の政治上の代表者の稱なり。

【緩急】クヮンキフ 危急なる場合の稱。

【用意】心をそゝぎ用ゐること。

【過去の災難】北清事件をさす。

【皮相】ヒサウ うはべのありさま。

【情態】ジヤウタイ ありさま。

【永遠】ながきあいだ。

## 七　宇治河の先陣(其一)

【關東】古の三關以東の諸國をいふ。

【はと】俗語の「はつと」といはんが如し。

【披露】ヒロウ 取りざたすること。

【院】後白河院をいふ。

【御門出】(ミカドデ) 上皇の西海にみゆきしたまふをいふ。

【狼藉】ラウゼキ 紛亂の意亂暴すること。(狼の草をしきて寢たるあとの、非常にみだるゝよりいでたる語。)

【斜ならず】ひとかたならずの意。

【牢籠】ラウラウ 窘窮すること。(くるしみこまる。)

【貴賤やすきことなし】貴きもいやしきも、心を安んじて居る心地のせざること。

【太政大臣】ダイジャウダイジン 才智道德共にすぐれて、天子の師範たるべき人を以て、之れに任ず。その人なければ缺く。故に則闕の官ともいふ。

【左右の大將】左近衛、右近衛の大將なり。

【顯官顯職】高位高官といふに同じ。

【卿相雲客】卿相は大臣納言參議などの稱。雲客は殿上人をいふ。四位五位及び六位藏人の昇殿をゆるされたる人の稱。

【誼を箴し】(ヨシミ シン) 義理合をいましめあふの意。

【無下】ムゲ これより下なくの意。

【交代おとりしたる源氏】平氏に比較して見劣りのする源氏といふ意。

【舊臣ゆかし】舊の平氏なつかしの意。

【兵衛佐】(ヘウエノスケ) 頼朝のことなり。時に頼朝右兵衛權佐なりし故にいふ。

【與力同心】ヨリキドウシン 味方となりて、心をあはすといふこと。

【追討】ツヰタウ うつてをさしむくること。(賊徒を征伐すること)

【逆鱗】ゲキリン 天子の御憤りをいふ語。

【鎌倉殿】頼朝鎌倉に館す故に頼朝の事を鎌倉殿といふなり。

【侍所】サムラヒドコロ　侍所の官人の詰所をいふ。侍所は武士を進止し、非違を検察し、罪人を決罰し、宿衛扈従の兵員を選擧することを掌る官にして、軍旅の時は機務に參與す。

【案の内】思ひ設けたるをいふ。

【ゆゝし】甚しの意。

【難處】險惡なるところ。

【橋は引きぬらん】橋板を撤して居るであらうの意。

【なべて】並べてにて尋常普通なること。

【亂杙】ラングヒ　數多き杙を、次第をみだして河中にうちこむこと。

【逆茂木】サカモギ　鹿の角の如くなりたる荆棘の枝を立て、折りかけて杭に結ひつけ、敵を防ぐの用となすもの。

【支度】用意すること。

【高名】カウメウ　名譽をあらはすこと。

【大名小名】ダイメウセフメウ　名田を多く領したるものを大名といひ、些少なるものを小名といふ諸侯の義となす。

【黨】タウ　組合仲間などの意にて、武士の團隊をさしたるなり。（三浦黨、松浦黨、兒玉黨など是なり。）

【高家】カウケ　武家の家筋のよきものをいふ。

【面面】メンメン　めいめいの意。（だれもかれも）

【祕藏】ヒザウ　珍重すること。

【佐殿】スケドノ　頼朝のこと。

【健馬】ケンマ　健剛なる馬。

【大河】ダイガ　大なる河。

【嚴石】ガンゼキ　いはいしのあるがけ。

【落す】高き所より低き所に下す。

【かくるも引くも】敵にかけ向ふにも、後方に退卻するにもの意。

【犬死】イヌジニ　徒に死ぬること。

【傾け】くつがへす。（ほろぼす。）

【傍若無人】バウジヤクブジン　人を人とも思はず、傲然として云ひはなつを云ふ。

【憚るところなく】ぶるんりよにの意。

【案じ】思案するなり。

【七人隱れ】土肥實平、田代信綱、新

開忠氏、土屋宗遠、岡崎義實、土佐坊昌俊と賴朝の七人を云ふ。

【蒲冠者】ガマノクワンジャ 範賴を云ふ。範賴の母は遠州池田驛の妓にして、範賴を近江の蒲生の御厨(ミクリヤ)に生みしによりて、蒲生冠者と稱せり。冠者は元服して冠したる少年の意なり。

【所望】ショマウ のぞみねがふの意。

【推參】スヰザン おしてまゐるの意。

【事闕く】ふじゆうをする。

【これほどの大事】これぐらゐの大事。

【たばでも】賜はずしてもの意。

【いかゝあるべき】どうであらうかの意。

【内外】ウチト 一門及び譜代のものも、外樣のものの意。

【眞平】マヒラ 偏(ヒトヘ)に又はひたすらにの意。(平伏しての義)

【まかり預らむ】まかりは接頭語にて御預り申したしとの意なり。

【落居】ラッキヨ 終結を告ぐるの意。

【上洛す】みやこにのぼる。(京都を



隋の帝都たる洛陽に比して洛陽と云ひ、加茂川を洛水と云へるによる。)

【料】レウ のりしろの意。

【辰の始】辰(タツ)の刻の始にて、午前八時を云ふ。

【早參】サウザン 朝早くより參殿することゝ。

【所存】ショゾン おもはく。(心中に存ずるといふ意。)

【御邊】ゴヘン その許といふ意。

【下向】ゲカウ 上方より下つて來ると云ふこと。

【佐々木莊】近江國蒲生郡にあり。佐々木氏の所領なり。故に氏とす。

【近きにつきて】近き方よりの意。

【歸參】キサン かへつて來る。

【見參(ケンザン)に入り】謁見すること。

【かたがた】あれやこれや。(序に。)

【まかり下る】下つて來たの意。(まかりは接頭語。)

【馳せ損じ】かけつぶす。

【知音】チイン しるべといふ意。

【心勞】シンラウ 氣苦勞すること。

【聞きあへず】きゝもをはらずの意。
【神妙】シンメウ いみじきことなりの意。(殊勝なりの意。)
【渡されなんや】わたされるであらうかの意。
【生立】オヒタチ そだち。
【殿原兄弟】トノバラケフダイ 定綱、經高、盛綱、高綱等を云ふ。殿原は殿たちの意。
【禦矢】フセギヤ 敵を防ぐために射る矢。
【日本半分ところそ】日本半分をも分ち與へんとなり。
【相構へて】アヒカマ心にかけて。
【相計ふべきなり】便宜をはかりとゝのらせんとなり。
【隨分】ズヰブン すこぶる。
【仰を蒙る】命令をうけたといふこと。
【今生の大御恩】コンジヤウ 現在の世にあつての大なる御恩の意。
【希代の面目】キダイ メンボク 世に類例なきほまれ
【家門の勝事】ショウジ 一家一門のめでたき事。
【畏り入りて】カシコマ おそれつゝしんで謝辭を述べてなり。
【舍弟】シヤテイ 弟の義。
【直參】ジキサン ちきぢきに謁見すること。
【もしもの事】萬一のこと。
【存ぜられよ】承知しておかれよとなり。
【そゞろかす】すこしも動ドウせざること。(おちつきはらつて。)
【座席になほり】座席にたちもどりて。)座りなほすこと。
【畏り】カシコマ謹んで正しく座す。
【勿論】モチロン いふまでもなし。
【存命】ゾンメイ 命ながらへて居ること。
【本意を遂げずば】ホイ もともとからののぞみを遂げなければ。
【敵は嫌ふまじ】キラ 敵は誰れかれの相手はかまはぬ。

## 八　宇治河の先陣

(その二)

【大手】オホテ 敵の正面攻撃にあたる主軍をいふ。

【搦手】カラメテ 敵を攻撃する別軍をいふ。
【垣楯(カイタテ)に搔き】楯をならべて垣の如くにしたるをいふ。こゝは橋板を楯の代に用ゐて、垣の如くにかき列ぬるなり。
【櫓】ヤグラ 弓矢を發射し、又は物見の用に供せん爲に、設けたる樓をいふ。
【河の耳】河の岸邊の意。
【分内】ブンナイ 領分内管内などいふ意なれども、こゝは場所といはんほどに見るべし。



【後陣】コウヂン 後方の陣隊の意。
【御曹司】オンザウシ 堂上諸家中の子息をいふ。部屋住の若者の稱。(義經のことなり。)
【雜色】ザフシキ 無位の雜役をつとむる役人の意。(あしがる又は中間の類。)
【歩足】カチベシリ 走卒なり。
【資財雜具】シザイザフグ 財産又はさまゞの道具。
【在家】ザイケ 在鄕の家の義。(百姓家。)
【下知】ゲチ 命令すること。
【のゝしる】聲高く呼ひたてること。
【この上は】かゝる上からはの意。
【續松】ツイマツ たいまつのこと。
【さりともと】それでもと思つて。
【風吹けば木安からず云々】戰のために、居民の迷惑して死亡するものさへ出來たるを、風吹けば樹木も吹き倒されなどして、安からざるにたとへたるなり。
【高櫓】タカヤグラ 高きものみやぐら。

【矢立の硯】矢籠(シコ)のうちにおさむべきやうに作れる硯。
【剛(カウ)の者】すぐれてつよきもの。
【注して】しるすこと。
【色めく】軍勢のいきほひだつこと。
【とどめく】轟くの意にて、がやがやとさわぎたつこと。
【うち紛(マギ)れ】聲がうち混じての意。
【平等院】ベウドウヰン 源融の別莊なりしを、後道長の山莊となり、賴道に至りて寺となしたるなり。
【鳴をしづめて】おとをたてずして

【目をかく】注目すること。
【郎等】ラウドウ 侍といふ意。(郎黨。)
【家の子】家の一族の意。
【舍人】トネリ 天皇又は皇子の左右にありて、雜役をつとむるもの。
【群(グシ)に抜けたる】多くの人々よりぬけいでたる。
【われとおもはんもの】自分こそはと思はん程のもの。
【物具】モノ、グ 甲冑のこと。
【瀬踏】セブミ 水の深淺をふみこゝろみること。



【矢筈】ヤハヅ 矢の弦をうくるところ。(矢筈を取るは、矢筈をとりて今にもひきしぼりて、放たんと用意することをいふ。
【引き取り引き取り】あとよりあとよりの意。
【剛座】ガウザ 剛の者の座。
【振舞(フルマヘ)す】はたらかせる。
【弓杖】ユンヅエ 弓を杖とすること。
【小冠者】コクワンジャ 年若き冠者の義。
【潭々】シンシン 水深き貌。

【滕々】ベウベウ 水大にひろき貌。
【虹の橋桁(ハンゲタ)】虹の形に似たる橋桁の意。
【危うして】危險なりい意。
【雁歯(ガンシ)の構(ガマヘ)】橋の構造、雁木の如くに材木の段をしつらへたるをいふ。
【奇(ク)し】あやしくふしぎなりの意。(巧妙なりの意。)
【矢ごろ】矢のとゞくべき程よき距離。
【雨の脚(アシ)】雨の降るさまをいふ。
【甲冑をゆりあはせ】甲冑を交互に搖り合せて、矢をふせぐやうにすること。
【矢間(ヤザマ)をたばひ】矢のあたるすき間をなきやうにかばふをいふ。
【重代】ヂュウダイ 累代といふが如し。
【裏かく矢】矢のあたりて裏まで射ぬくこと。
【庄司】シャウジ 莊園の所有者の命をうけて、莊園の事をつかさどるもの。
【事新(アタラ)し】中すも事あたらしの意。
【高倉宮】以仁王をいふ。

【渡せばこそ云々】渡されたから渡したのだ。
【見參に入れん】お目にかけやう。
【裝束】シャウゾク みごしらへ。
【木蘭地】ムクランヂ どんぐりの皮の染汁にてそめたる色合の地なり。（黄赤にして、少しく黒みを帶びたるいろ。）
【直垂】ヒタ、レ 鎧直垂のことなり。
【黒革威】クロカハヲドシ 黒の革にて緒通したる鎧。
【三枚兜】サンマイカブト 鍬（シコロ）の三枚ある兜。
【滋籐（シゲトウ）の弓】籐をしげくまきて作りたる弓。
【小中黒（コナカグロ）の矢】中ほどの少しく黒き斑ある羽にてつくれる矢。
【錬鐔】ネリツバ ねり革のつばの意。（いため革の上に、ねりものをつけてかためたるなり。）
【褐（カチン）の直垂】藍をこくそめて黒くなしたる色合の直垂。
【小櫻（コザクラ）を黄にかへしたる鎧】淺黄色の地に、小櫻模様のあるものを、鬱金色をかけてもえぎいろとなりたるもの。
【鍬形（クハガタ）打つたる】兜の前立に、鍬形の如きものをうちたるをいふ。
【笛籐の弓】笛の如く弓を黒くぬりて、籐だけを赤くぬりたる弓。
【石打（イシウチ）の征矢（ソヤ）】鷹の尾の左右とも、端より第一第二の羽をいふ。鷲の羽も同じ。この羽にてはぎたる軍陣に用ゐる矢といふこと。
【頭高（ツダカ）は負ひ】矢筈（ヤハヅ）の高く頭上に見ゆるやうに、矢をおひたるをいふ。



【嗔物造（イカモノツクリ）の太刀】凛々（リリ）しくいかめしく造りたる太刀の意。
【黄覆輪の鞍】キフクリン 金のふちをとりたる鞍。
【腹帶】ハルビ 馬のはらおひなり。
【二段】ニタン 一段は六十間なりとも、又布の長さ一反は三丈なれば、五間ほどなりともいふ。後説理にあたれるに似たり。
【たばかる】あざむかるゝことなり。
【安からず】心やすからずなり。
【究竟】クッキャウ 最もすぐれたるの

意。

【逸物】イチモツ　駿足なる乘馬といふ意。

【淵瀬をいはず】淵といはず瀬といはずとなり。

【ささめかし】さらさらと音たてゝなり。

【曲に渡し】眞面に渡すこと。

【期するところ】覺悟する所なりの意。

【流渡】ナガレワタシ　流るゝまゝに斜にわたすこと。

## 九　平家雜感

【めざまし】事の意外にしておどろくべきをいふ。

【南都の餘燼】南都の僧徒の横暴にして、平氏の命に從はざるを怒り、重衡通盛をして伐たしめ、東大寺興福寺を灰燼となし、僧侶を燒殺したる、そのもえさしの火といふ意。

【さめず】ひえざるをいふ。

【墨股の勝鬨】源行家、義圓兵を尾張に起し、墨股川をへだてゝ陣したるを、知盛、清經、有盛等の討ち平げし時のかちどきの聲といふ事。

【信越俄に云々】木曾義仲信濃に起り、その勢益振ひ、惟盛通盛等俱利加羅谷に敗れしをいふ。

【今を限】これまでだといふ意。

【一門の天下】平家の一族の支配し居りし天下。

【世はかく憂きを】世の中はかくの如く、憂きことのみなるのにまあ。

【みよしのゝ云々】吉野のおくに入らんにも、そこも既に平家にそむきて、味方となるべきものもなければ、そこにもかくるゝ場所はないのか。

【いざさらばやみなん】さあさうなつたならば、もうこれまでじや。

【いかにもなりなんよりは】どうにかかうにかならうよりは。

【一旦の凌辱を忍ばまし】しばらくの間のはぢを、こらへてもをらう。

【生死】シャウシ　しぬるかいきるか。

【譜第の邸宅】フダイトイタク　代代平家

に仕へ來りし人々のやしき。

【宿房】シュクバウ やどるべきすみか。

【一炬の煙となし云々】一つのたいまつの煙として、やきすてゝしまつた。

【あわたゞしかりしか】あわてたしわざであつた。

【鳳闕の礎】禁裏の土臺の石。

【椒房】シャウバウ 後宮をいふ。（皇后の御殿。）

【榮華をつくし云々】豪奢をきはめ、せいたくをしつくしたる都。（花の都の花は、都をほめていひたる詞なり。）

【燒野の原云々】經盛の歌に、「ふるさとをやけのゝ原とかへりみて未もけぶりのなみぢをのぞゆく。」とあるによれるなるべし。燒あとの野原とふりかへりながらの意。

【末は煙の波云々】ゆくさきは、煙波茫々たるいつこの波のはてに、流浪するであらうかの意。

【直衣】ナホシ（ノオシ）高貴の人の着用する略服。

【束帶】ソクタイ 古の正式の裝束の稱。

【黑金の衣】クロガネコロモ よろひのことなり。

【詠歌の餘哀】花鳥風月を弄し、詩歌を吟詠してくらしたなごりのあはれ。

【弓矢の譽】武士たるものゝ名譽。

【翠華搖々として】スヰクワヨウヨウ 翠羽を以て蓋を飾れる旗にて、天子の行列をいふ。（搖々はゆらゆらと風にゆらるゝをいふ。）

【秋風到る處に野に滿てり】どこにいつても秋風が吹いて居て、あはれをつげて居るといふ意。

【さすがにしのばるゝ云々】さはさりながら、思ひ出さるゝ昔の榮華の樣の、夢にさへ見て、忘れられぬを如何せんとの意。

【きのふは東關の下に云々】維盛頼朝追討の命を受けて、東國に下向し、富士川に至りし時のことをさせるなり。

【行方の空は云々】行くさきは、いつこの空にさすらふもわからねども

の意。

【身にしむ秋は欺かれず】身にしむ秋ばかりは、如何ともせんすべなしの意。

【月の出でくる山の端を云々】月の出でくる山の端を、遥かさきの都の空と思つたと見える。

【三軍ひとしく耳を欹つ】全軍のものが、たれもかれも耳を傾けて、きかんとするを云ふ。

【心も詞も云々】心に想像もつかねば、詞にかけていはんにもいふべき詞がたらぬとなり。

【秋の嵐の云々】秋の嵐が吹きすさばんとする時になつても、まだ春の夜の榮華の夢はなほ朦朧としてなり。

【覺めての後云々】榮華の夢のさめての後は、なる程有爲轉變の世常なりと云へれば、誠その如くに、かくなりはつるも世の常なりと、あきらめはするものゝ。

【先世後代云々】さきの世と後の世と、歳月の早くすきゆきて、再びかへすべからざるを何とせう。

【今を昔に云々】今を昔にかへさんことも難しといふに片絲をいひかけ片絲は一本の絲にてより合せられぬものなれば、よりくられたる世とつゞけたるなり。

【一題の遺詠(ヰエイ)に云々】平家都落の際、忠度が俊成の許に至り、敕選歌集の中に選び入れられんことを乞ひて、故郷の花と題する歌一首をえらび入れられたるをいふ。

【今世の本懐を終へ】生前の本意を遂げての意。

【恩愛にほだされ云々】維盛の妻子の愛にたへがたくして、屋島より都にかへらんとて熊野に至り、途ふさがりて至ることを得ずして入水せしをいふ。

【己身】コシン おのがみ。

【果報】クワホウ 前の世の因が來世にむくふ。

【桐の一葉に云々】桐の一葉のちりて秋をつぐるが如く、一門の人々に先きだちて入水して死を遂げ

て、世の中は永久にかへらぬ秋のあはれを告しが如く、漸次に一門の滅亡を告げたといふ意。

【あやしきまでに云々】ふしぎなるまでに、あはれな運命だなあといふこと。

【入道相國（ニフダウシヤウコク）】相國は太政大臣の唐名。入道は佛道に入りたる三位以上の人の稱。こゝは清盛をさす。

【弓矢のいさをし云々】勳功をたてたる保元平治の二役もはやすんだ。

【朝家の權柄（ケンヘイ）】朝廷の權力といふこと。

【殿上にのぼり】昇殿をゆるされたるものゝ意。

【私封】シホウ 私領地。

【攝籙】セツロク 攝政をいふ。

【四海の成敗（セイバイ）】天下中の刑罰を行ふ權力といふこと。

【昔殿上交をだに嫌はれし人】清盛の父忠盛の昇殿をゆるされしとき、廷臣みなこれを嫉み、闇討にせんとはかられしをさす。



【三百の禿童（トクドウ）】三百人の髪をかぶろに切りて、赤き直垂をきせたる童。

【京師の長吏云々】京都の市をとりしまれるかしら役人も、よこ目に見て通るばかりにて、手を下すものもないといふこと。

【十善の帝王】十善の德をつみたまへる帝王。（十善は、不殺生、不偸盜、不邪婬、不妄語、不惡口、不兩舌、不綺語、不慳貪、不瞋恚、不邪見これなり。）

【外戚】ケジヤク 母方の身うち。

【八幡（ヤハタ）賀茂の御幸（ゴカウ）】天皇御讓位の後、石清水の八幡、賀茂神社に詣でたまへる故例をいふ。

【八重の潮路云々】幾重にもうちよする潮路をこえて、嚴島明神に詣でたまはんと仰せだされたといふこと。

【不敵】フテキ 大膽不法の意。

【ゆゝし】はなはだしの義に解す。（いまゝし。）

【流離】リウリ 他鄉をさまよひあるくこと。

【法皇】太上天皇の佛門に入りたまへる後の稱。

【射山の嵐】藐姑射の山より吹きおろす嵐といふことにて、上皇の御所にふきすさぶ嵐の意。（射山は仙人のすむ山なれば、それより轉じて、上皇の御所を仙洞の御所といふによりてかけるなり。）

【重代の帝座】桓武天皇以來の帝都の意。

【愛宕の里のあはれ云々】平安の地のあれはて、物のあはれをとゞめた。

【あさまし】おどろくばかりの意。（あきるゝばかり。）

【咲も殘らず云々】さきそろつて未だ散りはじめぬ櫻花は、風が吹かずともそのまゝでやむべきか、いつかは必ず散るべきものじや。

【萠黃匂の鎧】鎧の袖、草摺などの上を、萠黃色にして、次を中黃に、その次をなほうす黃色にして、末を白くをどしたるよろひを云ふ。

【連錢蘆毛】レンゼンアシゲ 青白色に白きさしげありて斑文の連れる馬。

【容儀帶佩】ヨウギタイハイ 身のなりふり、衣服などのきごなしぶり。

【貴公子】キコウシ 身分貴き人の子息。（若殿。）

【算を亂す】さんぎをみだしたる如くに、あちらこちらにちりぢりになること。

【兩山】山叡延曆寺と、南都の諸大寺をいふ。

【反覆】ハンプク 言行をひるがへして敵となること。

【あはれ】さても。

【生涯】シャウガイ 一生涯のこと。

【命の際の身】臨終の身。

【觀じ】細心に識別す。（あきらむる）

【保平】保元、平治。

【いふにたらず】いふにもたらない。（それほどでもなくして功と賞とが相當しない。）

【帝座を驚す】宮城に入りて天子を急迫しまゐらしたること。

【非道の所行】みちならぬ行。

【小松の內府】小松の第にある內大

臣にて重盛のことなり。
【罪業】ザイゴフ 悪因のむくい。
【恩愛のきづな】父子の愛情。
【歸依】キエ 信仰して其の身を托すること。
【六欲】リクヨク 眼、耳、鼻、舌、身、意の六根より起る煩悩心のこと。
【煩悩】ボンナウ 心神を悩亂する無明貪欲の惑。
【淨樂】ジヤウラク 極樂淨土の安樂。
【欣求】ゴンク ねがひもとむる。
【今は】臨終の際をいふ語。

【かへすがへすも】いくへにも。
【佛事孝養】ブツジケフヤウ 佛事をつとめて、死者を弔ふこと。
【一念の執著】一心におもひこんだる我執の欲念。
【三世の因果云々】過去の行爲が現在に報い、現在の行爲が未來の結果となる如く、一念執著のために、三世の惡因果を我が身にひきうけて、輪廻すともの意。
【怨敵】ナンテキ 怨をふくめる敵。(賴朝をさす。)



【とまれかくまれ】どうむらうとも。
【一我】イチガ 一つの我執の忘念、即ち貪欲煩悩の邪念をいふ。
【眇軀】ベウク ちいさき身。
【浮塵】フヂン 空間にうかべるちりにて、物のかろきにたとへたるなり。

## 一〇 山時鳥

【目には青葉】孟子の、「口之於レ味也目之於レ色也耳之於レ聲也鼻之於レ臭也」の語の意をよめるなるべし。初鰹は四月頃のはしり鰹のことをいふ。
【みづうみの】さみだれの雨の降りつゞきて、湖水の水もましたといはん程の意なるべし。
【五月雨や】ふりみ降らずみの五月雨の晴れ間に、松間よりさしいでたる月のさまをよみたるらし。
【渡りかけて】流にかけたる橋上より、水中にある藻花を見てよみしなるべし。
【ゆくみづや】今や春去り、夏來り流の去りてかへらざるが如く、いつ

か相國寺の竹林のあたりに、蟬のこゑをきくの時節が來たとなり。（相國寺山城にあり）

【やま寺や】山寺なる椽の下なる苔路を流れゆく清水を見て、幽邃のさまを詠みたるなるべし。

【橋落ちて】前岸に到らんとて來て見れば、橋はおちて渡ることを得ではからずも水中に浮べる月を見たとなり。

【夕立や】夕立の雨のふりしきれる中を、家のまはりにあひるの鳴きさわげるさまを詠じたるなるべし。

## 二　十八樓の記

【亂山】ランザン　一樣ならざる多くの山。

【竹のかこみ】竹籔にて周圍をかこまれたるをいふ。

【引きはへ】布を引きのべたるが如くにおつること。

【行きかひ】往來。

【暮れがたき夏日】夏の永き日をいふ。



【高欄】カウラン　高き樓のらんかん。

【鵜飼】ウガヒ　鵜を飼ひならして、魚を捕らしむること。

【涼風一味】たゞひとつの涼風の意。

【想ひやる】想像する。

【このあたりの句】此のあたりはこの近邊なり。意きこえたるが如し。

## 三　箇あらそひ

【重寶】チヨウハウ　便利なりの意。（勝手がいゝ。）

【なかなか】さやうさやうの意。（然りと應ふる詞。）

【わごりよ】多くは婦人に用ゐる對稱。（おまへさんの意。）

【構やるな】構ふるなの意。

【お主】お前といふ意。

【ていと】きつとの意。

【目に物見せう】ひどい目にあはすぞの意。

【身共】拙者がの意。

【そち】其なたの意。（さげすみていふ意に用ゐる。）

【悔(クヤ)むな】後悔するなといふこと。
【聞いてたもれ】きいてたまはれといふ意。
【なうなう】呼びかける詞。
【律義】リチギ 正直にの意。
【理分】リブン いひ分をたてること。
【一口】ヒトクチ 同じやうにの意。
【埒が明かぬ】きまりがつかぬの意。
【何とあらう】どうであらうの意。
【一段と出來た】ひときはの出來だといふ意。

## 一三　丈夫の志

【學究】カクキウ はたらきのなさつまらぬ學者。「宋太宗、欲レ相二趙普一、或人譖レ之曰、普山東學究、惟能讀二論語一耳とあり。」
【大化】大に感化をうけて進歩すること。
【優遷】イウセン すぐれたる方にうつりすゝむこと。
【崇拜】ソウハイ 信仰してあがめたうとぶこと。



【欽慕】キンボ のぞみしたふ。
【戡定】カンテイ 戡は殺すなり。亂を定むるをいふ。
【壽(ジユ)と天(ヤウ)】長命と短命。
【畢生】ヒツセイ 生涯といふ義。
【宛として】あだかも。(さながら。)
【建業只期云々】事業の基を建つるには、只心の中に和聖東の成業を期待して居る。鬪爭は獨り那破翁の如きをこひねがふのである。よもすがら劒をひつさげて寒月に對して、古今を俯仰すれば、古今の興亡成敗の跡が眼中にありありとあらはれて來るとなり。
【天縱】テンショウ 縱は猶肆の如し。天よりゆるされて德をたもつと云ふ意。
【聖哲】聖人及び賢哲の人。
【私淑】シシユク 私に善くす。(敬慕する人あるも、親しく其人に接する能はず、唯其書をよみて、我が身をよくすること。)
【切瑳琢磨】セツサタクマ 角をきりみがき、玉をわりてみがくが如く、

研鑽勉勵の效をつむこと。
【地點】チテン 或るきまつたばしよ。
【水平線上の人士】世間普通の人よりもぬけたる人。
【欽し】キン 慕ふ。(思望)
【古人に得たる】範を古人に取つて、自己の才能を修得したるの意。
【偉器】キキ 大なる器量。
【放却】ハウキヤク なげやりにする。
【青蛙の黄犢學】青がへるの、前岸にある小牛を見て、それにならはんとて、むやみに腹を膨らして、遂に斃れたりとの譚。身の分際を忘れて向ふ見ずの事をなして、身を失へるものを戒めたるなり。
【顧盼自ら喜び】盼は眄の誤ならんか。否らざれば語熟せず。眄なれば音「ベン」にして、「ながしめにみる」と訓む字なれば、あとをふりむいて得意となる義なり。
【立地】たちどころの意。
【青衿】セイキン 若き學生を云ふ。「少年の書生は、青色の衿の衣服を服するに由る。」



## 一四 自警

【匹夫】ヒツプ 身分卑き、無位無官のものをいふ。
【一國に繫る】一國の運命にかんけいがある。
【五世界】五大洲の意か。
【日晷一たび移れば】ひかげが一度移り去りて、時を經過すると。
【形神】人の形體と精神とが離れて、生死の境を分つこと。
【悠悠】イウイウ 心長くいそがざる貌。
【何をか加へん】どれだけ自分の身に利得の加はるところがあらうかの意。
【自ら強うせば】自ら心をはげましし意志を鞏くすればといふ意なり。
【規矩を行はば】規は圓形を畫くの器即ち「ぶんまはし」矩は「さしがね」にして、規律に從ふを云ふ。
【人に規矩を待つ】人を規律に從はしめんと期待すること。
【空言】實行のともなはないことば。

【當時の務】現代の世のつとめ。
【清談】セイダン 老莊の道德を談ずること。
【一問】イッカン ちよつとのちがひ。

## 一五 白石と宣長

【偉人】キジン 偉大なる人物。
【興味】キヨウミ おもしろみ。
【主客の別】わが國に生れて、外國の文物に心醉して、內を卑み外を尊ぶを云ふ。
【漢意】カンイ 支那主義の意。
【排斥】ハイセキ おしのける。
【いちじるし】軼著なり。(目だつて)
【綿密なる財政家】綿密はこまやかなること、勘定奉行萩野重秀の、貨幣改鑄計畫に於ける奸計を看破して、其監督を嚴にし、又從來の金銀貨を改めて、純質に復せしめ、又和蘭船來聘のの高を定めて、金銀貨の流出を妨ぎし等を云ふ。
【敏腕なる外交家】うでき、の外交家。(朝鮮の來聘使に書辭の無禮なるを責め、待遇の分に超えたるを改めて我國の威權を發揚せしを云ふ。)
【卓絕なる歷史家】卓は秀づるなり。とひぬけた歷史家の意にして、讀史餘論、古史通の著をさす。
【西洋學の鼻祖】鼻は始なり。鼻祖は始祖の義なり。采覽異言、西洋紀聞などの著をさす。
【卓見なる語學者】見識のすぐれた語學者。東雅の著をさせるなり。
【神道】神祇を奉祀して、如在の禮を盡すを云ふ。靈魂不滅を信ずるの結果、故人に仕ふる事、なほ生前におけるが如くせんとするにあり。
【神學者】玉櫛筍(タマクシゲ)、玉鉾千首などの著により、我國の古道を發揮したるを云ふ。
【歷史家として】古事記傳の著をさせるなり。
【非凡なる語學者】非凡は凡人を超えたるを云ふ詞にて、詞の玉の緒、字音假字用格、漢字三音考等の著をさせるなり。
【文學批評家】源氏物語玉小櫛、萬葉

集玉小琴、新古今集美濃家苞などの著を云へるなり。

【千古不滅】幾年たつても滅せざるの意。

【峻嚴秋霜の如き】するどくきびしきことが、秋霜の身に泌む如く、人をさすが如き樣のあるをいふ。

【温厚春風の如き】春風の暖に面を吹くが如く、温和なる樣あるを云ふ。

【廟堂】朝廷を云ふ。（廟は祖先の靈を祀れる所、人君政を爲し事をあぐるに、必ず宗廟に告ぐ、故に政事の堂を廟堂と云ふ。）

【堂々】（キト）盛なる貌。

【忌諱に觸（ブル）るゝを辭せず】人君の機嫌を損ずるとも、とんちやくしない。

【世の外に云々】世俗をはなれて、住居を定むるを云ふ。

【鈴を鳴し】宣長鈴を愛し、心屈し意鬱すれば、鈴をならし音をきゝて、心をすまし意を慰めたるを云ふ。

【從容自適】（ショウヨウジテキ）ゆるりと迫らずして、心のまゝにたのしむを云ふ。

【性格】天性及び人となり。

【偉能】（イノウ）偉大なる才能。

【事實の實質】事柄のなかみ。

【創始】（サウシ）前人未發の事柄を創見して、建設すること。

【啓發を事とす】意を開き辭を達せしめ、教導してその蒙をひらくことをつとむるを云ふ。

【考證】古代の物事を說くに、證據の詮索（センサク）をつとめたるを云ふ。

【綜合】（サウガフ）種々の異りたる事物を、一體に合せ集めて、これを統一するを云ふ。

【組織】（ソシキ）個々別々のものを統合して、くみたつるを云ふ。

【讀史餘論】白石の家宣の前に進講せし草稿なり。天下の大勢九變して武家の代となり、武家の世五變して德川の代に及びし事を述べたる書。

【東雅】（トウガ）部門を十五に分ち、爾雅にならひ、和名類聚抄により、

本邦物名の語源を釋したるもの。

【東音譜】トウオンプ 我國の五十音を、支那諸州の音と對比して、その音韻を說明したるもの。又五十音のことを論じて、五十母字圖、五十母字音釋、音韻字母新譜をのせたり。

【古事記傳】古事記の註釋書なり。

【玉の緒】てにをはの性質用法等を詳說したるもの。

【三音考】吾國及び支那の發音のことより、吾が國音の純正優雅なること、支那音の溷濁なることを論じ、我が國の漢音吳音なるもの、亦正確なる支那音にあらず、今の支那音もまた、まことの古き唐音とは大に異りたるを論じたる書なり。三音は漢吳唐の三音を云ふ。

【信仰を本とし】前人の說を是とし信じて、これによりて考證研究を進めんとしたるを云ふ。

【科學家】特殊なる現象の原理に關し、概括して系統的に論述論明せんとする學。



【西南洋の蕃語】西班牙、葡萄牙などの蕃人の語。

【實地の日本】日本の現實について研究を進むるをいふ。

【理想の世界云々】理性によりて想像せる、完全なる地域に到達せしめんとするをいふ。

【逕庭】ケイテイ 逕は狹なり。庭は廣なり。大小廣狹の隔りたること遠きをいふ。

【足輕】アシガル 雜兵をいふ。

【失意に滿ちたる】世に用ゐられずして苦學したる時代をいふ。

【天下の大事に參與し】將軍家宣の顧問として、天下の大政にあづかり、謀議參畫せしをいふ。

【時勢の變】家宣の薨去と共に、白石の議の斥けられて、職を辭したるをいふ。

【榮辱地をかふ】昨日までの名聲赫々たるに反し、忽ち失意の時代となりて、さびしく世を送りたるをいふ。

【紀州侯の奧殿に奉仕し】紀州侯の

奥醫者となりしをいふ。

【二男】春庭、春村をいふ。

【三女】飛驒、美濃、能登をいふ。

【千歳の春を樂める】「山むろにちとせの春のやどしめて風にしられぬ花をこそ見め」と詠みたりし歌の意をいへるなり。

【境遇】キャウグウ 身のまはりあはせ

【うたた】いよ〳〵。(いつさう。)

【優然】イウゼン ゆたかにおちついて。

【混亂】コンラン 錯雜して秩序を失へるさまをいふ。

【偶然】グウゼン おもひよらざる意。(不圖。)

【軒輊】ケンチ 軒は車の後輕くして高きをいひ、輕は車の前重くして低きをいふ輕重の義。

【極端】一方にかたよりたるをいふ。

## 一六 門を造る説

【左右の翼】ヨク 兩側のそでをいふ。

【しつらへ】拵ふること。

【價の定】ジヤウ 定りたる豫算。



【意を得て】意のある所を心得てなり。

【かつかつ】からうじてなり。

【いかめしく】おごそかなりの意。

【いとにくげなれ】最も氣がすかない。

【片落】カタオチ つりあひを失すること。

【見苦し】みともない。

【似げなし】につかはしからずなり。(似合はぬ。)

【建仁寺垣】ケンニンジガキ 竹をわりて皮を外に平にならべたる垣。(京都の建仁寺に始りしもの。)

【ほゝ笑み】にこりと笑ふ。(微笑)

【しみのすみか】質素にしてくすみたるなり。

【澪標】ミヲツクシ「みをつくし」なり。澪(ミヲ)を示すために立つるしるし。

【怪しきもの】賤しきものゝ意。(みともない)

【王朝文】王朝時代の文。(平安朝以前の古文をさす。)

【覇府文】謙倉時代の文。

【何(ナ)でう事のあるべき】何といふ不思議なることのあらうぞ。
【要とある意】主要とする意。

## 一七　そぞろごと

【人の許(ガリ)】人のもとへの意。
【ひがひがしき】心のねぢけたといふこと。
【聞き入るべきかは】承知することが出來やうかい。
【かへすがへすもくちをしき】幾度思つて見てもなげかはしの意。



【をかしかりしか】面白きことばであつた。
【かばかり】これほどのちよつとしたことをといふ意。
【さしたる事】これとさしていふ程の用事といふ意。
【むづかし】「迷惑な」「困つた」などいふ意
【人と對ひたれば云々】人と對座して居れば、自然と詞も多くなり、身も勞れてぐたぐたになりて、心もおちつかないといふこと。

【よろづの事障りて】萬事に故障が起りてなり。
【いとはしげに云々】あらはにいはずとも、不請不性に、いやさうにいはんもよくないとなり。
【心づきなき事】心につきそはぬといふことにて氣にすすまぬといふ意。
【なかなか】却つて。
【その由をいひてん】他用ありて、對話しがたしといひきれば、それでよしとなり。

【同じ心に云々】心の好いた同志の、互にあひたいと思つて居る人のなり。
【つれづれに】徒然なるまゝになり。
【今しばし云々】今暫時の間、今日はゆるりとゝいふこと。
【この限り云々】前にいひたる場合とは又別だといふこと。
【阮藉(グンセキ)が青き眼】阮藉は西晉の代、竹林の七賢人の一人なり。此人氣に染まざれば、白眼を以て人を迎へ、心にかなへば、青眼を以て迎へた

りといふ故事あり。白眼は白眼(シロメ)をむくことにて、青眼は黑眼なり。

【その事となきに】別に何といふこともなきになり。

【のどかに ゆつたりと。

【又文(フミ)も】又書簡などおくるにもなり。

【聞えさせねば云々】何ともたよりせざればなり。

【過ぎにし方】すぎさつた昔。

【人靜まりて後】夜深く人々の寢しづまりて後なり。

【すさび】慰みといふ意。

【何となき具足(グソク)】何といふこともなく、そこらあたりにある道具といふこと。

【とりしたゝめ】取りかたづけなり。

【やりすつる】破りすつるなり。

【なき人の云々】既に故人となつた人の、手習ひ又何故とももなく慰にかいたものといふこと。

【たゞその折の云々】彼のなき人の、この世にあつて手習ひ、繪かきすさんだをりの心地すとなり。



【この頃ある人云々】今現に世にある人の文でさへもといふ意なり。

【居たるあたりに】自分の居る左右になり。

【調度】テフド 手道具などいふ意。

【持佛堂】ジブツダウ 佛壇のことなり。

【願文】グワンモン 神佛に願ひ申す文。

【作善】サゼン 願文に佛像を彫刻し、或は經卷を書寫することなど、書きつらねたるをいふ。

【文車】フグルマ 書架の下に車をつけたるもの。

【塵塚】チリヅカ はきだめ。

【見ぬ世の人云々】古人を友とするの意なり。

【文選】モンゼン 梁の太子蕭統の選にして、周秦以來梁に至るまでの詩文を類集せるものなり。

【白氏文集】白樂天の文集なり。

【南華(ナングエ)の篇】莊子のことなり。

【この國の博士(ハカセ)どもの書けるもの】和漢朗詠集、懷風藻、本朝文粹などをいふ。

## 一八　熊野落

【大塔宮】ダイタフノミヤ　延暦寺の座主たりしよりの名なり。護良親王をいふ。

【二品】ニホン　大寶令の規定によれる、親王に賜はる一品より四品に至る四階の位次の名目なり。

【虎の尾を履む恐】危險をおかすをいふ語。

【御身をおさめらるべき云々】御身をかくしたまふべきところといふ意なり。



【長夜に迷へる心地】いつまでも夜のあけずして、暗の夜にまよつたやうな心地がしてなり。

【鶉の床】鶉のふしどをいふ。

【御涙を爭ひ】御涙を露と共に爭ひたまへるなり。

【孤村の辻】かけはなれて、隣りなき村の四辻なり。

【人を咎むる里の犬云々】人を見咎めてほゆる犬にまで心のおかれて、御心をなやましたまふとなり。

【候入】コウニン　門跡家につかはるゝ總衆をいふ。

【按察法眼】アゼチホフゲン　按察は父などの官職よりつきたる呼名なるべし。法眼は僧官の名なり。

【紛れ出づ】混雜にまじりて出づ。

【おし屑脫がせ】はだおじぬぎの意。

【事協はざらん期】事の如何ともせんすべなかりけんとのときの意。

【もしやと隱れて見はや】それでも萬一にはのがれ得べきやもしれず、かくれて見やうかいの意。

【大般若】ダイハンニヤ　唐の玄奘三藏の譯したる佛書。

【唐櫃】カラビツ　唐風に作りたる四脚あるひつ。

【隱形の咒】オンギヤウジユ　身をかくす術のしうもん。

【やがて突き出でん】すくつきたてやう。

【推し量るも尙淺かるべし】どするりやう申しあげんにも、なほ御心勞のほどは、とても十分に推しはかりまゐらすることは出來まじと

なり。

【これ體】このやうなものゝ意。

【不思議の御命】おもひもうけぬ命といふ意なり。

【夢に道行く心地】うつらうつらとして、心も心ならざるさまをいふ。（自分で自分の身の心地のせざること）

【案の如く】かねて思へる通りになり。

【からから】呵々とおなじ。

【大塔の云々】大唐を大塔の音にひゞかしてしやれたるなり。



【玄奘三藏】ゲンサウサンザウ　玄奘姓は陳氏、印度に入り唯識を戒賢論師に受けたり。三藏は經律論の三藏に通ずる者を稱する語。

【柿の衣】柿色の無紋の衣にて、山伏の服なり。

【笈をかけ】オヒ　山伏行脚僧などの旅をする時、佛具道具など入れて背に負ひゆくもの。それを背にかけて負ふなり。

【頭巾】トキン　布にて作れる頭巾。修驗者の冠るもの。

【眉半にせめ】眉の半かくるるまでに頭巾をふかく被るをいふ。

【先達】センダツ　修驗者の峰入りのとき、同行者のさきにたちて案内者となるもの。

【山伏】ヤマブシ　修驗者のことなり。

【龍樓鳳闕】リウロウハウケツ　皇居をいふ。

【華軒香車】クワケンキヤウシヤ　華美なる車といふ意。

【單皮】タビ　足袋。

【脚半】キヤハン　はゞきともいふ。

【草鞋】ワラジ　わらくつの轉。

【草臥】クタビレ　疲勞の意にいふ。

【奉幣】ホウヘイ　社壯毎に奉るにぎて。

【宿宿】シユクジユク　宿場々々。

【御勤】ゴゴン　佛前に看經勤行すること。

【路次】ロジ　途中（みちすがら。）

【道者】ダウシヤ　行者のこと。

【勤修】ゴンジユ　佛道の修行の意。

【澳漕ぐ船の梶をたえ】由良は淡路

の東岸にある港にして、梶をは梶につきたる緒なり。この緒なくしてはこがれぬことなれば、澳を漕ぎゆく船の、梶の緒のたえたるが如く、いづこへ行かんも定なきに、宮の御身をくらべていへるなり。

【浦の濱ゆふ云々】濱ゆふは萬年青（オモト）に似たる草の名なり。一本の幹より、幾枚も葉生ひ茂りて、幹をつゝむにより、はまゆふの葉のいく重にも重（カサナ）る如くに、しげしげうちよする浪の間に、千鳥の鳴き叫ぶを、宮の御なげきにたとへたるなり。

【渺渺】ベウベウ はるはるとなり。

【藤代（フジシロ）】紀伊國海草郡にあり。

【月にみがける】月光をみがけるといひて、次の玉津島の玉にいひかけたるなり。

【玉津島】和歌浦にあり。こゝに玉津島明神あり。衣通姫をまつれり。

【さらでだに】それほどにも光り加はゝらずしてなり。

【長汀曲浦】チヤウテイキヨクホ 遠き水ぎは、入り曲りたる浦。

【心を碎く】あれやこれやを思ひてかなしむこと。

【雨を含める孤村】雨氣をふくんでをるかけはなれたる村。

【切目（キリベ）の王子】紀伊國日高郡にあり。

【叢祠】サウシ ほこら（小祠。廟。）

【片しき】かたかたの袖をよせて寢るをいふ。

【兩所權現】本宮、新宮の兩所をいふ。

【應作】オウサ ひろく衆生（シユジヤウ）を濟度（サイド）せんために、機に應じて化身（ケシン）を現じ作すといふ意なり。

【苗裔】ベウエイ 末胤といふが如し。苗は胤なり。裔は衣裾の末なり。（子孫の意。）

【冥闇】ミヨウアン くらきこと。（光をあらはさぬこと。）

【玄鑒】ゲンカン 神の深遠なる照覽といふ語。

【むなし】その效なきをいふ。

【神もし神たらば云々】神もし神の威靈をそなへたまふならば、何故

に我君を照覽して擁護を加へ、君たるの道を行はせさせ給はざるかの意。

【五體】からだ。(頭と兩手兩足)

【丹誠無二】タンセイブニ 一心をこめたるまごゝろ。

【感應】カンノウ 衆生の信仰力を感といひ、佛の大悲力を應といふ。(法力のあらはるゝこと。)

【禮拜】レイハイ 祈禱のこと。

【窮屈】心も體もまゝならぬこと。

【鬢結ひたる】髮を兩方に分ちて、わがねて兩方へ下げたる結び方なり。

【熊野三山】本宮、新宮、那智をいふ。

【道指南】ミチシルベ 道案内者。

【肝を消す】ひやひやすること。

【空翠】クウスヰ 山氣をいふ。

【萬仞の青壁】萬ひろもあらん程の、青みたる壁の如ききりぎし。

【千丈の碧潭】千丈もあらんばかりの、あをあをとしたるふかきふち。

【缺け損じ】けがをすること。

【草鞋血に染みたり】草鞋は「さうかい」とよむを本音とすれども、よみならしにて「わい」とよむなり。わらじも血に染みたりとなり。

「はかばかしく」はきはきとなり。



## 一九　舊都の月

【新都の事始】新都の造宮の事始なり。

【上棟】ジヤウトウ むねあげ。

【遷幸】センカウ 天子の遷都したまふをいふ。

【あさまし】きもつぶるゝ、又おどろくばかりなること。

【源氏の大將】源氏物語中の主人公をさすなり。

【左大將】サダイシヤウ 左近衛の大將。

【蓬が杣】蓬の甚しく茂れるを、杣木に比していへるなり。

【淺茅の原】短くして繁茂せざる茅。

【ふしど】臥處の意。

【蟲の聲々怨みつゝ】蟲の鳴く聲は、どれもこれも荒れ行く秋をなげきかこちながらなり。

【黃菊紫蘭の野邊】もと庭なりし時

にうゑたりし蘭菊も、今は叢生したる野邊となりはてたとなり。

【近衛河原の大宮】近衛通の東河原にある、皇太后の宮居といふ意。

【御所】ゴショ 大宮の御所をいふ。

【隨身】ズキシン 警護の舍人のことなり。

【惣門】サウモン 外構の正門なり。

【女房】ニョウバウ 宮仕へしたる侍女の稱。

【蓬生の露うち拂ふ云々】蓬の生いしげれる間の露をふみわけて、訪ひ來る人もなき所にといふ意。

【さはべらば】然やうであるならばなり。

【つれづれに】徒然なるにまかせてなり。

【御格子】ミカウシ 細く角なる木を縱横にくみたるもの、寢殿の四方を蔽ふために作れるなり。

【つと】突となり。(突如、唐突などいふ意なり。)

【現】ウツ、此の世に現在してあることと。(現實。)

【優婆塞の宮】先帝の第八の皇子、宇治に閑居したまへる方をいふ。

【夜もすがら心をすます】夜通し琵琶を彈じ琴をたまさぐりつゝ、俗情をたちて心を世外におくこと。

【在明の月】夜の明けて後までも殘れる月の意にて、明方の月を云ふ。

【撥にて招き給ひけむも云々】優婆塞の宮の御女の兄弟の、琵琶琴など彈じたまへるに、雲がくれたる月の俄にいとあかくさし出でたれば、扇ならでもこれしても月は招きつべかりけりと、のたまはせたるときのことを指せるなり。

【小侍從】コジジウ 大僧都法印光清の女なり。

【小夜】サヨ 夜といふにおなじ。(さは接頭語なり。)

【今樣】イマヤウ 五七一聯の句四聯より成れる一種の形式をそなへたる歌。

## 二〇 月夜逗子より友人に寄す

【既望】キバウ 陰暦十六日をいふ。
【口碑】コウヒ いひつたへ。
【源平盛衰記】二條天皇慶保中より、安德天皇壽永中にわたれる二十餘年間の物語なり。
【恰當】カウタウ ちようど相當せるの意。
【蒼茫】サウバウ うすぐらきこと。
【當面】すぐ目のまへ。
【恍惚】クワウコツ「明ならざる貌。(惚は惚(ホウトツコツ)の誤ならんか)
【奇峰突兀】あやしき峰が高くぬきんづること。
【篤と】トク 心をおちつけてなり。
【聯歩快談】レンポ ならんであるき、おもしろく話しあひてなり。
【深寂】シンジャク しづかなること。
【帽簷】ボウエン 帽子のつば。
【海上に天あり云々】空は水にうつりて水中の空とも思はれ、空はすみわたりて空中の水かと思はるゝとなり。新後拾遺集の歌の、「水や空そらや水ともみえわかずかよひてすめる秋の夜の月」の意なるべし。



【高潮】タカシホ 高くうちよするしほ。
【波、浪、濤、瀾】波は廣き意を有し。浪はやゝ高く石に激し、風にあひてたつ所のもの。濤は山の如く高く、雷の如き響をなしてよせくるもの。瀾はよこびろく大にして緩くうねりてよするものをいふ。
【天地の心をいひやぶる】天地の心を言ひつくしてしまふ。
【雄大玄深】ユウダイゲンシン をゝしくおくふかきこと。
【蛇行】ダカウ うねうねとあるく。
【巉巖】ザンガン とがりて高きいはほ。
【東鑑】アヅマカヾミ 高倉天皇治承四年より以後、八十七年間の鎌倉幕府の記錄なり。
【武衛】ブエイ 兵衛府の唐名なり。こゝは頼朝をさす。
【逍遙】セフエウ そゞろあるきすること。
【御家人】ゴケニン 幕府直轄の士を稱す。

【面面】メンメン われもわれもなり。
【小笠懸】ガサカケ 騎射の式なり。（笠を的にして騎馬にて射る。）
【しのばれ】思ひ出でらるゝなり。
【今人不見古時月云々】今の人は昔時の月を見ざれども、今吾人を照せる月は、曾て古人をてらして來た月であるの意。
【井上梧陰】名は毅、熊本の人なり。文部大臣となる。
【別墅】ベッショ 別莊。
【門を敲く】タタク 訪問すること。

【奇礁】キセウ くしきいは。
【榻】タウ こしかけ。
【庭除】テイヂヨ にはさき。
【婆娑たる松間の月影】ちらちらうつりて居る松間の月影なり。
【江湖】世間の意。
【漫談】マンダン とりとめたることもなきはなし。
【生憎】アヤニク をりあしくなり。
【霑淡】アンタン うすぐらきこと。
【六代御前】ロクダイゴゼン 維盛の長子六代のことなり。

【鬼火】キクワ あやしき火。（幽靈などの火。）

## 二二　荒野の末

【ものゝふの歌】草葉の露の一陣の風に散らさるゝは、まことはかなきものながら、しかも身を鋒鏑の間に處して、命をすつる武士の身と、いづれかまづきゆるかと、消えをあらそひし荒野原の古戰場には、誰とぶらはん人もなく、唯秋風颯颯として、吹きすさぶのみなりとなり。
【笠置山の歌】いまや秋もくれ方なれば、明日よりは冬となれば、そのをり降らむ時雨を、はや今日より降らせて、黑雲空にみだれ、秋風さへそひて、いとすさまじとなり。（時雨は初冬の頃降るものにして、秋降るものにあらざればかくよめるなるべし。）
【こし方はの歌】いまきた後方を遙にかへりみれば、あなたの末迄、春霞がかすみて、青野が原の青草

のしげみに、雉子の聲がするよとなり。

【ふきおろすの歌】ふきおろす風のために、木の葉も見えて、平氏の軍兵が義仲に敗られ、この谷にけおとされたるも、かくやとばかりに、思ひ出されて、いとすさまじく倶利加羅の山陰に、北風凛烈として吹きすさんで居るとなり。

【こゝをせとの歌】こゝを先途と先陣をあらそひし、高綱景季を始めとして、武士らの芳しき名の流るゝ、宇治の川波であるよとなり。



## 二三　故郷（その一）

【沐猴冠者】モクコウクワンジャ　沐猴は猿の一種なり。人の衣冠を著くても、心は人に類せざるをいふ。（沐猴久しく衣冠をつくるに堪へず、以て人の性の躁暴なるにたとへしなり。）（項羽をさす）

【不朽】フキフ　永世つきざること。

【笈を負ひ】遊學すること。笈は書籍を入るゝ箱なり。

【歸心矢の如く】故郷にかへりたしとの意の切なるをいふ。

【戀々】レンレン　戀ひ慕ふこと。

【チエール】佛國の大政治家にして歴史家なり。

【大宰相】ダイサイシヤウ　總理大臣をいふ。

【鄉先生】ゐなかの教師。

【ミニスター】宰相もしくは公使などをいふ語にして、教會の牧師にもいふ。

【カドリック】天主教をいふ。

【戯言】キゲンしやうだんを言ふこと。

【辨ぜよ】ベン　處辨せよとなり。

【都尉】トヰ　秦の時の武官の名目なり。

【一飯の德】イッパン　韓信未だ志を得ざりし時、飯を漂母に受けしことあるをいふ。

【漂母】ヘウボ　せんだくばゞといふこと。

【累累】ルキルキ　いくつもかさなりあつて居ること。

【維を下らず】機臺を下らざりしをいふ。
【蛇行匍匐】はらばひしてにしり出ること。
【郊迎】カウゲイ 城下はづれまで出でむかへる。
【漢高】漢の高祖劉邦をいふ。
【豐沛】高祖の起れる地。
【銀杏村】イテフムラ 太閤の出生地。
【マウント、バーノン】首府華盛頓の近傍にあり。
【爛たる偉勳】はなやかなる偉大の



勳功。
【憐を乞ふ】同情を求むること。
【不世出】フセイシュツ 數世を經てまれに出づるといふ義。(世にめつたにあらはれない。)
【得意】トクイ 世に用ゐられてもてはやさるゝとき。
【失意】シツイ 世に用ゐられずして、不平なるとき。
【好遇】カウクウ よくあしらふ。
【虐待】ギヤクタイ むごくあしらふ。
【孔子の魯を去るや云々】孟子に、「孔子之去レ齊接レ淅而行、去レ魯曰、遲々吾行也、去二父母國一之道也。」とあり。
【遲々】徐行の貌。
【マリア】「ガリラヤ」の「ナザレ」邑なる、「ダビテ」の裔「ヨセフ」の妻なり。夫と共に「ベテレヘム」に有て馬槽の傍に「イエス」を生みぬ。
【ヤコブ】其父は「イエス」の伯父なり。
【ヨセ】「イエス」の親族なり。
【シモン】「イエス」の從弟なり。
【ユダ】「クレオパス」の子なり。
【奇才異能】すぐれた才、異りたる才能。
【豫言者】未來をかたるもの。

## 二三 故郷（その二）

【村落】人のあつまり居るところの意なり。
【眼孔】ガンコウ 目といはんが如し。
【宇宙】ウチウ 天地をいふ。
【客觀】カククワン 自己又は意識に觀察せらるゝ一切の外物。

【感觸】カンショク 外界の刺激にふれて感ずること。

【客舍幷州の詩】幷州の客舍にありて、既に十年を經たり。歸心矢の如くにして、日となく夜となく、咸陽を想起さざるときはない。然るに玆にはしなくも望を達して、歸途について、桑乾の水を渡りて、遙に過ぎ來りし幷州の地を望見すれば、久しくすみなれし土地の、今更にしたはしくなつかしとなり。

【無レ端】タンナク はからずも、又はゆくりなくもなり。

【神聖】たふとくして汚すべからざるさまにいふ語。

【聯感】レンカン 聯想に同じ。

【馳驟】チシウ 疾歩の意（かけまはる）

【碧血】ヘキケツ ふる血の變色したるもの。

【懷舊の感】クワイキウ 往時を追想するの感。

【勃勃】ボツボツ そゞろに起りたつこと。

【恍然】クワウゼン きぬけのした如くに何故ともなくの意。（うつとり。）

【混混】コンコン 分別なきさまにいふ語。（水蒸氣の爲に、濛々として白日なほくらきをいふ。）

【インスピレーション】人の精神上に、一種靈妙なる力を與ふる、神靈の超絶的感化をいふ。

【記念碑】思ひ出の種とすべき碑。

【千絲萬縷】センシバンル 筋の數多きにいひ、又細かなるにいふ語。

【想像】サウザウ 既知の事實、又は智識を材料として、新事實を構成する心的作用。

【バイロン】英國の大詩人なり。

【鄕國に容れられず云々】「バイロン」其行爲のあまりに狂的なりしより、新婦は離婚を求め、社會は責めのゝしりたれば、不平の結果再度の大陸漫遊を企て、英人の宗教、道德、政治等を痛罵して、憤をもらしたりといふ事實をさせるなり。

【憤慨】フンガイ なけきいきどほる。

【泛泛】ハンパン 水に浮び流るゝ貌。

【灰となる】死を云へる詞なり。

【大人君子】大德の人、才德衆にこえたる人。

【風雲の氣】風雲の變に乘じて、功名を起てんとする氣象。

【兒女の情】女の如き柔弱なる心を云ふ。

【多血多涙の熱腸】血も多く涙も多く、熱心なる情にとんだ腸。

【身を先帝に致し】一身を劉備にさゝげて。

【遊子】旅客のことなり。

【斛聲齁々】カンセイコウコウ ねいびきの聲の高きをいふ。

【耦耕】グウカウ ならんてたがへす。

【飄然】ヘウゼン ふらふらとの意。

【ルール、ブリツタニヤ】英國の國歌なり。

【催眠術】サイミンジュツ「めすめりずむ」をいふ。

【悚然】ショウゼン おそれてぎよつとする貌。(みの毛がよだつ。)

【佇立】チヨリツ たゞずむ。

【明星】ミヤウジヤウ 金星のことなり。

【精金】シヤウキン 質のきはめてよき



黄金。

【天の原の歌】茫々淼々たるはてしなき海のあなたをながむれば、一輪の明月團々として光を放てり、この月や、奈良の故郷にありし時、夜な夜な眺めし春日の里の、三笠の山に出でたりし同じ月なるか、さても故郷のしたはしさよといひたるなり。

【一唱三歎】一たびとなへて、三人之れに和するといふ。

【能因法師者流】能因法師は歌人なり。嘗て都にありて旅行をよそおひ、「都をはかすみと共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關」と詠みたりしことあり。これをさして云へるなるべし。者流は此の者のたぐひといふことなり。

## 二四 諷諭

【法師】ホフシ 僧侶の通稱。

【石清水】イハシミヅ 石清水の八幡宮なり。山城綴喜郡にあり。

【かちより】徒行にての意。

【極樂寺】男山の麓にあり。
【高良】カウラ 男山の麓にある末社なり。武内宿禰をまつれり。
【かばかりと心得て】これだけと承知してなり。
【ゆかしかり】懷し。ナツカ
【ほい】本意。
【先達】案内者。
【聖人】シヤウニン 智德を具して、一心に佛道を行ずる人をいふ。
【いざ給へ】さあ來たまへなり。
【かいもちひめさせむ】かいもちひは牡丹餅なりとも、又そばかきなりともいへり。何も馳走するものはなけれど、そばかきだけは食はせんといひたるなり。
【具しもていきたるに】伴ひてゆきたるになり。
【ゆゆしく云々】甚し〻信仰心をおこしたとなり。
【獅子狛犬】シシコマイヌ 神社の前におく。守護の心なりとぞ。
【殊勝】シユシヤウ まことに奇特なりの意。



【御覽じとがめずや】御覽なすつて御氣がつかなかつたかの意。
【無下】ムゲ 非常なりの意。
【都のつとに】都への土產にとなり。ミヤゲ
【ゆかしがる】おくゆかしく思ふ。
【おとなしく】おちつきておだやかなるの意。
【定めて習ひある事云々】必定傳へたる由來あることなるべしとなり。
【さがなきわらはへ】よからぬ兒童。
【奇怪】キツカイ けしからぬ不都合なりの意。

## 二五　國民の抱負（その一）

【史筆以來】シヒツイライ 歷史あつて以來の意。
【滔々】タウタウ 水の流れ行く貌。
【朝宗】チフソウ 趣き歸する義なり。（諸侯天子に見ゆるに、春見ゆるを朝と云ひ、秋見ゆるを宗といひしが、後轉じて、河水の海に注ぐに用ゐる語となれり。

【猶太】ジュダヤ「ばひろにあ」追放後の「へぶらい」人を指す。

【神の王國云々】唯一上帝を崇拜して、一神教に固着し、他宗教と混同せんことを避け、他宗教を排斥し、神教崇拜の王國を建設せんとしたるを云ふ。

【天職】テンショク自然にそなはりたる務。

【剝奪】ハタダツ はぎとる。

【法王政】カドリック教全教會の最上立法者にして、其職權を教外に及ぼし、宗教上、「キリスト」の制定と稱する條規を以て律し、尙良心及び神法に對する事件の裁判權を有せる制度。

【海上權】海上を制壓する權力。

【殖民】シヨクミン 外國の一地域に、人民を移住せしむるを云ふ。

【自主自由】獨立して他の保護干渉を受けず、自分で自分の事を處理してゆくこと。(自己を權力の本體として、隨意の行動を取ること。)

【寄與】キヨ 社會國人に利益幸福を



與ふるを云ふ。

【抱負】ハウフ いだきもつ考。

【思想】經驗と思考とによりて生ずる意識の現象。

【感情】人の自然に備ふる快不快、好惡、憎愛の情をいふ。

【文明の潮流】人事百般の事物のひらけゆく時勢のさま。(文明の波及するさまを潮にたとへたるなり。)

【斬新】ザンシン きはだつてあたらしきこと。

【鼓舞】コブ はげましたつること。

【元氣】精神の活動力。

【沈靜】チンセイ しづかにおちついて動かざること。

【潤澤】ジユンタク うるほす。

【燒點】セウテン 物事の集中する一點。

【風靡】フウビ 風の草木をなびかす如くに從はしむるを云ふ。

【驚天動地】キヤウテンドウチ 天地を驚かし動す程の働を云ふ。

【活劇】クワツゲキ 目ざましき行動。

【瞠若】ダウジヤク 目をみはつて呆れ

はつること。
【呆然】ハウゼン きぬけして馬鹿のやうにの意。
【餘波】なごり。
【刹那】セツナ 極めて短小なる時間（一指彈の間の意）
【吹聽廣告】フイチヤウクワウコク あまねくつげしらすること。
【蠢動】シユンドウ うごめくこと。（無智の意。）
【アッシリア】古昔西方亞細亞の王國なり。

【陽氣】ヤウキ 外氣外部に向つて揚發せんとする氣。
【攪破】カクハ かきみだす。
【括約】クワツヤク しめくくる。
【西漸】セイゼン 西方に向つて徐々にすゝむこと。

## 二六 國民の抱負（その二）

【識者】見識高き人。
【先覺】センカク 學問智識ある先進者。（先輩。）



【宣傳】センデン 命令をしいて傳へしむる。
【悟了】ゴレフ さとつてしまふ。
【一日千秋】待ち遠き思をなすこと。
【思惟】シヰ 思ひみる。
【天下を以て自ら任じ】天下の事を以て自分の務むべき事としてひきうける。
【大義名分】大義は君臣の大なる道義。名分は人倫の名目を正して分明にすること。
【四海】四方の國々をさす。

【權謀術數】ケンボウジユツスウ 正道にあらざる權變の謀、及び計策。
【一視同仁】平等に慈愛を加ふること。
【大道を體し】宇宙を支配すべき一定の道を身にひきあてゝ行ふ。
【横道】ワウダウ よこしまなるみち。
【說破】セツパ ときやぶる。（相手の說をうちやぶること。）
【勦誅】サウチウ 誅戮を加へてほろぼす。
【陋見】ロウケン 識見せまきこと。

【駸々】シンシン 馬の疾く行く貌。
【修練】シウレン おさめてたんれんすること。
【狂奔】キャウホン 心も狂はんばかりにかけまはる。
【土芥も雷ならず】一身をなげすつること、土やあくたの如くなるのみでない、もつとやすつぽく思ふこと。
【身を殺して仁をなす】生命をすて、心の德を全うする。
【義務】自分の盡すべき道をなしおほす心。
【沸騰】フツタウ わきあがる。(奔騰。)
【師表】シヘウ 師範に同じ。表は木をたて、日の移るを見るもの。師は行正しく弟子の望んで法をとるものゝ稱。人の表面に立つて模範を示し、これにならはしむるやうにするを云ふこと。
【私欲の氾濫】欲心の天下にはびこれるを云ふ、(氾濫は水の横流するに云ふ語。)
【絶海に孤立し】かけはなれた海上にはなれて獨りたつこと。
【超越】テフエツ 超然としてけだかく身をかまへて居ること。
【掃蕩】サウタウ はらひたひらぐること。
【扶持】フヂ たすくること
【誘掖】イウエキ たすけみちびく。
【掣肘】セイチウ 人事を行はんとして、行ふ能はざらしむること。(宓子賤二吏をして字をかゝしめ、其肘を掣きて、自由にかく能はざらしめたりと云ふ故事。)
【壓倒】アツタウ おしたふす。
【根絶】コンゼツ ねだやしをすること。
【君臨】クンリン 君主として國民の上にたつて、人民をおさむること。
【化身】ケシン 權化若しくは假現なと云はんが如し、假りに姿をあらはすと云ふ意なり。
【警醒】ケイセイ 目をさまさすること。

修訂 中等國語讀本卷七終



# 修訂 中等國語讀本字解 卷八目次


一 團結心と家族制……一
二 壇の浦 その一……三
三 壇の浦 その二……八
四 修善寺だより……一一
五 外人の觀たる富士……一三
六 自然のあはれ……一五
七 百蟲譜……一九
八 うへ野山……二三
九 戰爭と文學……二五
一〇 爲朝の軍議 その一……二九
一一 爲朝の軍議 その二……三二
一二 奥の細道……三六

一三　木枯……四一
一四　日野山の閑居……四二
一五　死と永生……五〇
一六　義士討入の模樣を報ず五三
一七　福澤先生を悼むその一…五六
一八　福澤先生を悼むその二…五八
一九　歡樂卿……六一
二〇　丹波少將……六三
二一　比良の山風……六六
二二　落花の雪……六九
二三　故事二則……七四
二四　光賴卿の參內……七六
二五　奈良朝の歌平安朝の文八二

修訂中等國語讀本字解卷八目次終

# 修訂中等國語讀本卷八

## 一　團結心と家族制

【專制の君】　自己の意志によりて、獨斷的に行ふ政治を司る君。

【廓大】　クワクダイ　大きくひろげること。

【族制政治】　ゾクセイセイヂ　家族的の政治と云ふことにて、家族を國家社會の單位とし家長をして家族及び財產を支配せしむる制度をいふ。

【發達交涉】　ハツタツカウセウ　のびたちかたと、君主と家族と兩者の間を相互に關係せしむること。

【社會學】　社會の構造形式、及び發達變遷等を研究する科學。

【盡未來際】　ジンミライサイ　時間のつゞくかぎりの間、幾萬年の後までも。（永遠に。）

【氏姓】　シセイ　氏は古昔家々の血統に從ひて、一族子孫相稱する各個の家の稱號にして、今は苗字とも

いふ新田、足利、德田、織田の如し。姓（カバネ）は古昔血族の關係によりて社會の秩序を立て、以て國家を編制したりし時の氏族の名に添へて呼びし稱號、臣、連、朝臣、宿禰等なりしが、後には多くは源、平、藤、橘等を姓と稱したり。

【氏神】 氏の祖先を祭れる神、藤原氏が天兒根の命を祀れる春日明神を氏神とするが如し。

【眷親】 ケンシン 親屬といふにおなじ。

【輯睦】 シフボク やはらぎむつましくする。

【和氣靄靄】 ワキアイアイ おだやかにのどかなる氣が雲のあつまりたなびける如くに國家にみちて居ること。

【歸趣】 キシュ 人心のおもむき向ふ處。

【沈滯萎靡】 チンタイヰビ しづみとゞまつて勢ひなくよわりちゞまること。

【犧牲】 ギセイ 天地宗廟に供ふる



「イケニヘ」なり。色の純なるを犧といひ、トし得て未だ殺さゞるを牲と云ふ。これより轉じて或る目的のためになげだして用ゐるをいふ。

【歸嚮（キキヤウ）するところ】 おもむきむかつてゆく中心點。

【註脚】 チユウキヤク 本の說明として書きそふること。

【古今を通じ】 古今にわたりて。

【抑揚波瀾】 ヨクヤウハラン 或は高く或は低く、波瀾の如くに國勢のさまゝに變遷すること。

## 二 壇の浦 その一

【水手】 カコ 船をつかふことを業とするもの。（水夫）

【かんどり】 かぢとりの音便にて楫取の義。

【中納言】 チユウナゴン 平和盛なり。

【女院】 ニヨウヰン 建禮門院なり。名は德子、平清盛の女なり。

【二位殿】 ニヰドノ 清盛の室時子、位二位なるよりかく稱するなり。

【女房】ニョウバウ　尚侍より以下禁中の女中に稱せり。

【ともかくも】どうにもかうにもなり。

【東男】アヅマヲトコ　關東男子なり。

【しづかなる戯言】タハブレゴト　おちつきはらつたたはぶれ言。

【をめき】わめくに同じ。

【見はて】見てしまう。

【練色の二衣】ネリイロフタツギヌ　薄黄色の同じ色の二枚がさねの衣を云ふ。(練色は絹にても、綾にても剛く張らずねりて柔らかにして、地合純白ならずうす黄ばみたるを云ふ。)

【白袴のそば】白き袴のはしなり。

【先帝】センタイ　安德天皇の御事。

【寶劍】崇神天皇の時模造したまへるみつるぎ。

【神璽】やさかにの曲玉なり。

【ねびとゝのほらせ】年よりもおとなびて物事になれておとなしくおなりなさるゝこと。

【御形あてに】おすがたが上品での意。

【御髮】ミケシ　頭髮の敬稱。

【ふさやか】ふさ〳〵との意。

【いまぞ知るの歌】みもすそ河は五十鈴河の別稱なり。伊勢國にありさて歌の意は、いまこそはみもすそ河の末流には浪のそこにさへも天祖皇太神の末裔にましますみかどの都があると云ふことを知つたとなり。(御裳の裾と云ふ義より末裔にかけ、五十鈴河が大廟の下をながるゝ河なれば、安德天皇の御入水にかけて云へるなるべし)。

【八條殿】八條局をいふ。

【國母】コクモ　天皇の御生母をいふ語。

【帥典侍】ソチノスケ　平時忠の妻なり。

【ふしまろび】轉びをうつてなり。

【聲をとゝのへ】誰れもかれも聲をそろへてなり。

【おびたゞし】甚だしき有樣なりの意。

【艫舳】ロヂク　舟の「とも」にも「へさき」にもなり。

【一天の主】 一天下を支配したまへる君の意。

【殿をば長生云々】 殿舍を長生殿とよび、門を不老門とよびたりしは皆かぎりなき君の御齡をことほぎ奉りて呼びたりしをの義。

【鱗】 イロクヅ 魚類といふ意。

【無常の風】 一切の諸法は常に生、住、異、滅の四相にうつされ、一物として常住なるものなきを無常と云ふ。(有爲轉變の定めなき風の意)。



【月にかゞやさし萬乘の玉體】 兵車萬乘を出す土地を有したまへる貴き天子のおからだといふ事にて、玉體といへるによりかゞやく緣ある月をかきそへたるなり。

【蒼海の浪】 あを〳〵としたる海の浪といふこと。

【有待】 ウダイ 凡夫の身と云ふことなり。(又無常の意にも解せり)。

【誰かはたのみある】 何人か恃みとすべきものがあらうかの意。

【兵革】 ヒヤウカク 兵は兵器、革は甲冑にて、戰爭を意味す。

【燒石】 ヤキイシ 溫石とて冬日體をあたゝめんために懷中するもの。

【渡邊次郎兵衞番】 ワタナベジラウベウエッカフ。

【源五馬允呢】 ゲンゴウマノジョウムツル。

【熊手】 クマデ 熊の爪の如き鐵鉤の柄あるもの。

【彌生】 ヤヨヒ 三月のことなり。

【藤重の十二ひとへ】 藤重は表うす紫裏青なり。十二單は單衣の上に五衣十二領重ねきたるを云ふ。五衣は表とおなじいろなる衣五つ重ねて、裏は一つ〳〵紅の平絹を付けたるをいふ。

【翡翠の御髮】 翡はやませみとて燕に似て羽の色青黃色なり。翠はかはせみとて羽の色うるはしき青黑色なり。髮の色のつや〳〵しく黑きをいへるなり。

【しほたれ】 潮にぬれて水のしたゝること。

【いたはし】 あはれなりの意。

【唐綾の白小袖】 支那より傳來せる

綾今の唐綸子の白の常の衣の綿入。

【夷】（エビス）東夷の義。

【畏りて】（カシコマ）おそれつゝしむ。（正しく座す）。

【うなづく】首肯。（かしらをまへに動す。）

## 三　壇の浦　その一

【打物】（ウチモノ）人を撃つ物にて、太刀薙刀を云ふ。

【寄せ合せ】互に近くよつて組みうちすること。

【面もふらず】脇目もせず。

【矢頃】（ヤゴロ）矢をはなつほどあひ。（矢のとゞく距離）

【さしつめさしつめ】「ひつかけひつかけ」なり。

【あだ矢】むだなる矢。

【面をむけ難し】（オモテ）正面より向つて行くことがかたい。

【よしなき事】何と云ふわけもなきこと。（つまらないこと）

【あながちに】強いてなり。



【存ずるところ】承知して居るところ。

【判官】（ハウグワン）義經のことなり義經非違使の尉なりしを以て云ふなり。

【大童】（オホワラベ）大なる童形の意にて、髪をふり亂したるを云ふ。

【草摺】（クサズリ）鎧の腰より下を覆ふ部分の稱。

【身をしたゝめ】身仕度をする。

【さすが】さはさりながら。

【僻目】（ヒガメ）ひとみの正しからざること。（見ちがへ）

【太政入道】（ダイジャウニフダウ）清盛を云ふ。佛道に入りたる太政大臣の意。

【門脇中納言】（カドワキチウナゴン）敎盛六波羅總門のそばに第宅をおかれし故に世人門脇殿といへり。

【尻足蹈んで】あとあしをひいてなり。

【ものもし】をこがましく又はぎやうさんなりの意。

【つと寄る】（ツト）突とよるの意。

【さしくゝりたる】つなぎあはした。
【力なく】力がおよばないこと。(せんかたなしの意。)
【今をかぎり】これまでの命だの意。
【大領】ダイレウ　郡司の長官、郡司は國司の下に屬して郡内の政務を行ふものを云ふ。
【やは】何として(いかで)。
【仔細にや及ぶべき】答ふべきことわけにおよばうかい。(勿論のことなりの意)
【軍の最後】最終の意。

【しづしづ】心靜に(悠然と)。
【つれなき命】「つらめなし」にて面目なしの意。(厚顏)
【大臣殿】オトヾドノ　宗盛のことなり。宗盛時に右大臣なればなり。
【右衛督殿】ウエモンノカミドノ　宗盛の子清宗をいふ。
【二所】ニショ　二人と云ふこと。所は貴人を數ふるに云ふ語なり。
【心ら】心づらしの意。
【念佛】ネンブツ又ネブツ　彌陀の稱號を唱ふること。

【赤符】セキフ　赤き徽章の意。
【越路の雁】カリ　越路は北陸道の古稱なり。(越路より來れる雁の意)。
【蜀江の錦】ショクコウ　支那の蜀の地より產する錦。
【思ひならべて】彼れと是れとを比較してなり。

## 四、修善寺便り

【雨の日くらし】雨の一日をおくりての意。(雨中の小暗きに云ひかけたるなり。)

【無聊に困み】ムレウ　さびしくつれ〳〵なるにくるしんでなり。
【荒涼】クワウリヤウ　あれすさびて物凄さこと。
【慘憾】サンクワ　むごたらしきわざはひ。
【宿業】シュクゴフ　前の世の罪惡によりて、自ら作り出したるむくい。(過去のむくい。)
【低回】テイクワイ　たちもどりて去る態はざる貌。
【建立】コンリフ　造りたてる。

【一切經堂】イッサイキャウダウ　一切經は佛教の經典の總名にして、此の一切經をおさむる堂といふ事。

【奥津城】オクツキ　はかの古名。

【考證】カウショウ　證據を考へて證明すること。

【丈六佛】ヂャウロクブツ　丈一丈六尺ある佛像常にあぐらの座像につくる。

【暗涙】アンルヰ　人しれぬなみだ。

【徹夜】テツヤ　夜どほし。

【黎明】レイメイ　黎は黑なり。黑と明と交り、明けんと欲して明けざる貌。

【交睫】カウセフ　まぶたをあはす。（眠につくこと。）

【玲瓏玉の如し】レイラウ　明にてりかゞやくさまは、玉のすき通りたるが如しの意。

【踊躍】ヨウヤク　うれしくしてとびたつさまを云ふ。

【撮影】サツエイ　しやしんを取ること。

【逸り】ハヤ　いらだつてあはてる。



【應急】オウキフ　急場のまにあはせ。

【やをら】そろそろ。（徐々に）

【赤脚】セキキャク　あらはにあらはしたる足。

【辛うじて】やつとのことで。

【印畫】インクワ　たねいたに物像のうつること。

【倥偬】コウソウ　事の迫促せるさまをいふ。（いそがはし。）

【惡箋】アクセン　あしきまきがみ。

【才覺】サイカク　くめんすること。

【地紙】ヂガミ　扇子唐紙など張る厚き紙。

【居然】キヨゼン　座して動かざる貌。（そのまゝのといふ意）

【短冊】タンザク　細く裁ちて和歌など書く料紙。

【すがれ】末枯の義にて、おとろえつきんとするさまを云ふ。

【山厨】サンチウ　山中の臺所。

## 五、外人の觀たる富士

【臥遊】クワイウ　山水の畫幅などを見て樂むこと。

【自家】ジカ　じぶん。
【象徴】シヤウチヤウ　其のもの自身が説明を要せずして、直に或る意義を發揮すること。
【超然】テフゼン　周圍の雑山の中にこゝ出づること。
【端然】タンゼン　姿のとゝのひてたゞしき貌。
【御衣の裳】オンソノモヽ　めしたまへる衣のすそ。
【優然】イウゼン　ゆつたりとゆたかに。
【曳さはへ】ヒ　すそをながく。ひいて居ること。
【湄】ホトリ　海邊。
【一抹の翠黛】マツスヰタイ　ひとなてしたほどの綠のまゆずみ。
【配合の致】チ　取りあはせの風致。
【紅曦】コウトン　くれなゐの朝日。
【暮靄】ボアイ　くれ方のもや。
【超脱】テフダツ　ぬけいづる。
【崇高無限】スウカウムゲン　かぎりなくけだかし。
【丹青家】タンセイカ　畫家。
【鐵筆家】テツピツカ　彫刻師。



【竹村越】タカムラゴシ　竹籔の上を見越しての意。
【星斗闌干】セイトランカン　星の光のあざやかなること。
【狂喜】キヤウキ　常を失ふばかりによろこぶ。
【青海原の歌】アヲウナハラ　あを〳〵としてひろき海の波の、幾重ともなくかさなれる潮路をわたつて來て、今こゝて富士の高嶺を見たる時のうれしさよとなり。
【餘蘊】ヨウン　つゝみたくはへておくところなく十分にの意。
【安定を省し】アンテイ　やすらかに身をおちつけて休息して居る。とさの樣々見て居つて。
【眉目】　すがた。
【衆峰難ニ倶儔ニ】トモニチユウシ　多くの峰巒は共にならびたつことはできない。

## 六、自然のあはれ

【月見るにこそ云々】　すべての愁ある時は、月を見るによつて憂もわすれて、心をなぐさむるのだと云

ふこと。

【月ばかり】 月程の意。

【おもしろし】 情にかなつて興味深しの意。

【露こそあはれなれ】 露ばかりは情がこもつておもしろしとなり。

【折に觸れは云々】 時に際し物に感じたならば、何によらず月でも露でもおもしろからざるはなからんとなり。

【風のみこそ云々】 風ばかりは日夜あけてもくれても其時其物を感ぜしむるものじやとなり。



【時をもわかず】 春夏秋冬共になり

【沅湘日夜云々】 沅水湘水共に河なり。此二つの河は日夜東に向つて流れて居るが、嘗て物思にしづんで居る人のために止つた事はないと云ふことにて、唐の戴叔倫が都を戀ひて詠せる詩に、「蘆橘花開楓葉衰、出門何處望京師、沅湘日夜東流去、不下爲二愁人一住少時上」とあるによれるなるべし。

【嵇康】 ケイカウ 山濤、阮籍、阮咸、劉伶、王戎、向秀と共に竹林の七賢人の稱あり。好んで山澤の遊びをなしたり。

【さまよひありく】 所さだめずぶらぶらあるく。

【花はさかりに云々】 花は滿開のとき、月は雲のかゝるところなくさやけきをのみ見るべきものかの意

【雨にむかひて云々】 雨に對して見えぬ月をこひしく思ふ。

【たれこめて云々】 籠などおろして外出もせずの意。

【春のゆくへ云々】 春の過ぎゆくも知らずとなり。

【なほあはれに云々】 目の前に見たるよりはなほさら興味があつて情が深いとなり。

【咲きぬべき云々】 今にも咲くほどになつて居る梢。

【詞書】 コトバガキ 歌の意をよくきこえしめんとて、歌の心を前にかく詞を云ふ(はしがきとも云へり。)

【まかり】 往來すの敬語なれど、こゝは單に往くの意に見るべし。

【障る事】 故障があつてなり。
【さる事なれど】 さうあるべきことなれどなり。（尤なりの意）
【望月】 モチヅキ みちつきにて十五夜の月を云ふ。
【いと心深う】 最も心深くあはれなりの意。
【青みたる云々】 たそがれの月は黄に見え、あかつきの月は青みて見ゆと云へるによりて書けるなり。
【うちしぐれ云々】 少しばかり雨のふつて月光の雲にかくれたるぐらねのところといふ意。



【又なく云々】 二つとなくおもしろしとなり。
【身にしみ】 甚しく心に感ず。
【こゝろあらん友云々】 かゝる幽玄の風趣を愛して、共に語るに足るべき風流の士の欲しきものなりとの意。
【目にて見る云々】 それほどに目ばかりで見るものであらうか、心にも思ひやるべきものなりとなり。
【たのもしう云々】 心だよりに思はれておもしろいの意。

## 七 百蟲譜

【優しきもの〻限】 優美なるもの〻その上もなきもの。
【めでたし】 愛すべきなりの意。
【莊周の夢云々】 莊周が萬物變化の理を説くにも、己れの身を胡蝶に假託して説いたのであるといふ意。（莊子に「昔莊周夢爲二胡蝶一、栩々然胡蝶也。自二喻適一志與、不知周也。俄然覺、則蘧々然周也。不レ知下周之夢爲二胡蝶一與、胡蝶之夢爲レ周與上。周與二胡蝶一則必有レ分矣。此之謂二物化一。とあり）
【蛙は古今の序に云々】 古今集の序に「花に鳴く鶯、水にすむ蛙の聲を聞けば、いきとしいけるものいづれか歌を詠まざりける」。とあるを云ふなり。
【歌よみのつら】 歌詠みの列の意。（歌人のなまか）。
【古池に飛び云々】 芭蕉の句に「古池や蛙飛びこむ水の音」とあるに

よる目さましたるは芭蕉が寂しき池に蛙のとびこみて天地閑寂の氣を破りたる音に、人生の幽玄を感じ俳諧の一體を覺悟したるを云へるなるべし。

【憎むべきかぎりながら】 此上なく憎むべきものとは云ふものゝ云ふ意。

【卯月】 陰暦四月を云ふ。

【端居(ハシヰ)】 家の端迄く居ること。(縁先などに出て居ること)。

【長月】 陰暦九月を云ふ。

【七賢】 竹林の七賢人をさす。(第六稽康のところ參看)

【五月晴】 サツキバレ 五月雨頃の晴れ間にの意。

【日ざかり】 日中の意。

【やがて死ぬ云々】 芭蕉の句に「やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲」。とあり。蟬は命短きものなれば、やがてまもなく死ぬべきものなるに少しもそんな樣子も見えず、盛んに鳴いて居る。人々の中にも蟬の樣な境遇に居て、自分には少しも心つかないで居るものがあるよとなり。

【蜉蝣】 フイウ かげろふ。(朝に生れて夕に死するものなりとぞ)。

【物ずきの謗(ソシリ)】 たてくふ蟲もすぎずきと云ふ諺あり。これによりて書けるなるべし。

【雲水】 ウンスヰ 行脚僧を云ふ。沙門の世に行ずる風雲流水の如く、去住無心なるが故に云へるなり。

【原吉原】 原の原町とて沼津を距る二里餘東の方なる驛なり。吉原は鈴川驛の西北半里にあり。

【むくつけき】 きたなげなる、又はおそろしげなるとも解す。

【うとまる】 忌みきらはれること。

【後生(ゴシヤウ)を願ひ】 佛道に體依(キエ)して、極樂の往生(ワウジヤウ)を願ふこと。

【殺生】 セツシヤウ 生命あるものを殺す。

【蟋蟀】 キリギリス 「こほろぎ」のこと。

【つゞりさせ云々】 古今集に、「秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせ

てふ蟋蟀なく」。とあり。歌の意は。「藤袴の花が秋風にほころびたさうで、其綻びをつゞりさせ〳〵といつてきりぎりすがなくわい」。と云ふ意なり。

【藻にすむ蟲云々】 古今集に、「あまのかる藻にすむ蟲のわれからと音をこそなかめ世をば恨みじ」。とあり。歌の意は、あまの刈る藻の中にわれからと云ふ蟲が居ると云ふことじやがその蟲の通りに何事も自分からじやと悟了してこそ泣くなら泣きもせう。決して人を恨みまいぞ。能く思つて見れば、人を恨むるはまちがいぢや」。と云ふ意なり。

【蓑蟲の云々】 枕の草紙に、「蓑蟲いとあはれなり。鬼の生みければ、親に似てこれもおそろしき心地ぞあらんとて、親のあしき衣ひききせて、今秋風吹かん折にぞ來んずる、まてよと云ひてにげいにけるも知らず、風の音聞き知りて、八月ばかりになればちゝよちゝよとはかなげになくいみじくあはれなり」。とあるによりて書けるなるべし。

## 八 うへ野山

【いちめんの歌】 上野の山には花が一面にささかつて居る遠方より見れば、上野廣小路の黑門あたりまでも白雲がかゝつたやうだといふことにて、碁盤の上といひしより一面と云ひ、また碁石の白黑を黑門と白雲とにいひかけたるが此歌の妙處なり。

【あらそはぬの歌】 しな〳〵として風のまに〳〵靡いてあらそふことをしない柳の絲によりてこそ、勘忍のふくろもぬふことができるのであるよとの意なるべし。

【ほとゝぎすの歌】 時鳥の鳴くのをおもふまゝに聽くことが出來るやうな山里は、酒屋へ三里、豆腐屋へ二里といふやうな土地において こそ得らるゝのであるとなり。

【時鳥の歌】 後德大寺左大臣の、時

鳥なきつる方をながむれば唯有明の月ぞのこれる」。と云ふ歌を原として詠みたるにて歌の意はありあけの空に窓おしひらいて、唯ぼんやりと有明の月をながめて居るものがあるよ。あれは後徳大寺が時鳥の聲に夢おどろかされて、時鳥のゆくへをあされがほにながめて居るのであらうよとなり。

【あまのはらの歌】 大空にまんまろく月のすめる秋の空をながめつゝかんがへて見れば、こよひこそはちやうど中秋の十五夜であるよとなり。

【駒とめての歌】 古人は、「駒とめて袖打ちはらふひまもなし」と詠んだが、今予は雪ふる中をこゝまで來つれども坊主合羽を着て居る事なればそんな心配もなしとなり。

【歌よみはの歌】 貫之は古今の序に歌の徳をあげて、天地を動しといつて居るが、歌人が下手なればこそだ。もし上手な人がありて天地をも感動せしめて、ゆるぎだす樣な事があつたならばたまつたものぢやないぞとなり。

【つひにゆくの歌】 しまひにはかくなるべしとは兼てしりながらその心構もせで遂にかくなつてしまつたとて、幾度も愚痴をこぼしつゝ毎日々々いひくらして居るよとなり。

## 九　戰爭と文學

【思想】 經驗と思考とによりて生ずる意識の現象にして、觀念もしく概念の統一結合せるものなり。

【感情】 精力の關係によるものにして、精力の活動增進するときは快樂を感じ、精力の活動衰弱するときは苦痛を感ず。常に全體を總合統一して現ずるものなり。

【因緣】 インネン 物事の成立するもとゐ即ち因と、成立せしむる力即ち緣とによりて定められたる人生の關係を云ふ。

【果報】 クワハウ 因果の應報にして果は因事の歸著、報は彼より來り

てその事故の此に成就したるをいふ。

【動機】 ドウキ 行爲を促し、最も直接なる根底の原因。(はづみ)。

【因果】 イングワ 原因と結果とを連結したる關係、卽ち一が他に對して變化の因となり他が一に對して變化の果となれる狀態を云ふ。

【ルリー】 佛國十八世紀に於ける極端なる民主主義論者なり。

【革命】 前の王統くつがへりて、他の王統代りて統治者となるを云ふ



(目的が國家の基礎に關し、行動が憲法の範圍を超えたる政治上の變化。)

【ボルテール】 佛國の著作家にして、宗教を侮り信教の自由ならざるを難じたる人なり。

【水戸藩の各勤王家】 藤田東湖、會澤安等を云ふ。

【導火】 ダウクワ みちび。

【白日夢】 白日夢に耽るの義にして卽ち妄想を云ふ。

【譫語】 タンゴ たはごと。

【得喪】 トクソウ 得失に同じ。

【利己的】 觀念思想が自己の幸福、利益、便利、保存、快樂と云ふ如く、總て自己を唯一の中心とし基礎とするを云ふ。

【差別的】 現象界、平等界の如く、もの〻それ〴〵に差別ある世界の義。

【遊戲三昧】 イウギサンマイ 遊戲の一途に心を傾くるを云ふ。

【別天地】 俗人外の一種の世界。

【枘鑿相容れず】 ゼイサク 物の相齟齬して合はざるを云ふ。史記に、「持二方枘一、欲レ内二圓鑿一、其能入乎。」とあり。鑿はのみにて穿てる穴なり。枘は栓なり。

【文弱】 文學のみに耽り、尙武の風おとろへて惰弱となるを云ふ。

【殺伐】 サツバツ あら〳〵しきこと。

【現世的】 說く所の主旨がおもに現世を限とし、現世を超脫したる境に及ばざるを云ふ。

【平等的】 彼此の差別を立てずして總て平等にこれを遇するを云ふ。涅槃經に「悉皆平等無レ有二差別一」

とあり。

【等閑】トウカン　意を留めざるを云ふ。なほざり）

【天馬蟄す】シツ　天馬は奇變出沒羈絆すべからざる天才を云ふ、蟄はかくるゝなり。

【客觀の詩】世態人情をそのまゝ外より見て、其觀察のまゝをうつしたるもの。

【純乎】ジュンコ「もつぱら」と云ふことにて、まぜりけのなきを云ふ。

【劇詩】ゲキシ　行爲行動の舞臺の上に演ぜらるゝ行動と云ふ意義を有し、語をかふれば行ふて見する物語と云ふ意なり。

【小說】作者の想像によりて結構せられたる、人事の美的旨趣を敍するものを云ふ。

【主觀の詩】わが感想をそのまゝに寫したる詩。（主觀は知覺し思考し又感動する自身と云ふこと。）

【繡腸】シウチヤウ　詩文の思考に富める腸。



【現當】現世と當來卽ち未來となり。

【功德】クドク　積德己に足りて德外に及ぶこと。（積善の力）。

【好尙】カウシヤウ　このみ。

【叙事的】自家の主觀的感懷を表白するを主とせずして、客觀卽ち客我の叙狀描寫を旨とすること、近松の淨瑠璃は絕好の實例なり。

【揣摩】シマ　情をはかり意を摩するの義にして、我心を以て他を推測するを云ふ。

## 一〇　爲朝の軍議その一

【新院】イマキノイン　崇德上皇を云ふ。

【齋院の御所】イツキノミヤ　白河にあり。白河殿の內なり。（齋院は加茂大神に奉仕したまへる皇女の御所。

【北殿】ホクデン　白河北殿又は白河大炊御門殿ともいふ。

【左府】左大臣賴長なり。

【平馬助】ヒヤウマノスケ　右馬助とて右馬寮の次官なり。（平氏なるを以て平馬助と云ひしなり。）

【藏人大夫】クラウドダイフ　五位の藏人を云ふ。

【六條判官】ロクデフハングワン　六條堀川に居て、檢非違使尉なりしを以て、世人は六條判官と云ひしなり。

【不覺】フカク　不覺悟の意にて、油斷して失策すること。

【左衛門大夫】サエモンノタイフ　衛門の尉にして、位の五位なるを云ふ。

【器量】キリヤウ　こゝは體格の意に解す。

【矢ゝき早の手利】ハヤテキキ　矢をつゞけて射ることの神速なる妙手。

【矢束】ヤツカ　矢竹の長さなり。（物の長さを手にて握り計るに、拇指の外の四本をそろへたる巾を一束といふ。）

【不敵】　大膽にして物事に恐れぬこと。

【所をおかす】　不遜の意。（心のまゝにふるまふを云ふ。）

【傍若無人】　人を人とも思はず傲慢なるを云ふ。

【ふけう】　不孝なり。君父の勘氣をうくるを云ふ。（勘當）

【めのと】　子供をもりそだつべきひと。

【總追捕使】ソウツキブシ　數國を管し部内の奸惡の徒を、逮捕鎮靜することを掌る。

【押しなつて】　官命によらずして自分からなること。

【香椎宮の神人】カシヒノミヤ　香椎宮の神官なり神人は神官、社人などの稱、香椎宮は筑前國香椎村にあり。

【上卿】ジヤウケイ　公事を奉行せる人の首席を云ふ。

【外記】ゲキ　太政官の主典にして、恒例臨時の大小公事の詔書奏文を勘造し局中に記錄する官。

【宣旨】センジ　任官の勅を直に頭の辨に下さるを口宣と云ひ、頭辨上卿に傳ふるを口宣案と云ひ、上卿旨を受けて外記に命ずるを宣旨と云ふ。外記旨を受けて出すを綸旨といひ、之れを頭辨より任すべき人に授くるなり。

【忽諸】コツシヨ　ないがしろにすること。（かりそめにする意。）

【朝憲】テフケン　朝廷のおきて。

【綸言】リンゲン　天子の詔を云ふ語。
【梟悪】ケウアク　梟(フクロ)が夜中小鳥を襲ふて取るが如く暴虐なるを云ふ。
【狼藉】ラウセキ　狼の寢たるあとの亂れたるが如く亂暴なること。
【執達】シツタツ　文書を取りつぐこと。
【參洛】サンラク　京都へ上り來るを云ふ。
【解官】ゲクワン　官職を解くを云ふ　解官に三つの場合あり。一は自己の犯罪又は父子兄弟の連座、二は式部省にて功過を考へ私罪又は公罪によれるもの、三は致仕滿期廢官等によれるものこれなり。
【上洛】ジャウラク　京都に上る。
【上聞】ジャウブン　朝廷への聞え。
【傅子】メノトゴ　乳母の子と云ふにおなじ。

## 一一、爲朝軍議その二

【目角(メカド)二つ切れ】目尻と目頭との切れたること、或は一説には目尻に二本の筋あることゝも云ふ。英雄の相貌なりとぞ。
【獅子の丸(ジシノマル)】獅子の形を丸くしたる模樣。
【八龍】ハチリウ　八龍の鎧は、源家重代の鎧の一なり。龍を八つ胸板に打ちてつけたるなりとぞ。
【大荒目(オホアラメ)の鎧】鎧の札は通常小なるを綴りたるものなれども、これは横に長くしその札を三枚ほど重ねて緒も太くかつ所々間を荒くあけて縅したるを云ふ。
【著るまゝ】著ながらの意。
【熊の尻鞘(シリザヤ)】熊の皮にて作れる尻鞘にて、尻鞘は鞘にかくる袋なり。
【五人張の弓】五人力にて張る弓。
【鈌】ツク　弓の矢ずりの鈌に打つ折釘。
【黑羽の矢】鷲の黑羽にて矧ぎる矢。
【樊噲】ハンクワイ　漢の劉邦の臣にして武勇のほまれ高し。
【ゆゆし】勇々しの意。
【張良】漢劉邦の帷幕の臣にして功勞高き人なり。
【吳子、孫子】吳子は衛の兵法家に

して、魏の文侯の將となりて功勞多き人なり。孫子は齊の兵法家なり。吳王に仕へて名を諸侯の間にあらはれしめたり。兵法十三篇を著はしたり。

【養由】ヤウユウ　楚の大夫にして射を善くし、柳葉を百步にして百發百中せりと云ふ弓の名人。

【擧りたまふ】皆一同に出でかけ給ふの意。

【はからひ申せ】計略をせよとなり。

【折角の合戰】骨を折りし合戰の意。

【主上の御方心にくくも候はず】後白河天皇の御味方には、物々しく手にたつ人物はなしとなり。

【驅け出んずらめ】かけ出して戰はんとするであらうの意。

【眞中指して】咽喉の眞中狙うての意。

【へろへろ矢】しなしなしたる極めて弱き矢。

【行幸他處へならば云々】主上の軍敗れ他に落ち行きたまはんこともあらばなり。

【駕輿丁】カゴチャウ　主上の御輿をかつぐ仕丁。

【行幸を云々】主上の行幸を此の白河殿におさせ申してなり。

【掌を反す】手のひらをかへすが如くに事のきはめてやすきを云ふ。

【荒儀】アラギ　淺慮にして無謀なりの意にて、用意のたらざるを云ふ。

【さすが】これ程の堂々たると云はん意なり。

【御國あらそひ】主權の爭奪の意。

【南都の衆徒】奈良興福寺の僧を云ふ。

【指矢の三町遠矢の八町】弓の上手にて、二町程隔てゝ走る鹿をもよく射てければ、里人集りて弓勢試みしに、差矢は三町、遠矢は八町をたやすく射渡したれば、名づけたるなりといふ。

【富家殿】フケドノ　賴長の父忠實を云ふ。

【院司の公卿】院の御所を司れる大臣參議などを云ふ。

【承伏】ショウフク　承知して從ふ。

【先縱】センシャウ　先例。
【似も似ぬ事云々】合戰の事には似よりもつかぬことなればなり。
【道にもあらぬ云々】公卿のすべき道でもない合戰の評定をなり。
【武略】合戰上の謀略。
【大衆】ダイシュウ　多くの僧。
【安穩なるべき】のんきにして居られやうかの意。
【風上】カザカミ　風の吹き來る方角。

## 一二、奥の細道

【風騷の人】フウサウ　風流人なり。
【紅葉を俤にし】ケヲカゲ　秋の紅葉をおもかげにばかり殘してなり。
【あやめふく日】五月五日を云ふ。
【馬酔木】アセミ　あしびに同じ。春小白花開く、牛馬これを食へば中毒す。
【四維國界】四方の國境。
【歳次】サイジ　年のまはり。
【按察使】アゼチ　古昔諸國の風俗教化の狀況などを觀察せし官の名。
【節度使】セツドシ　一地方の軍旅を都督し、其諸政を監督する官。
【歌枕】ウタマクラ　歌によみ入るべき雅なる地名。
【行脚の一德】アンギヤ　諸國をめぐりあるいた一つの利得の意。
【存命の悦】ゾンメイノヨロコビ　いのちをながらへて居つた甲斐ある悦。
【蜑の小舟】アマブネ　れうしのこぎゆくふね。
【國守再興】元祿二年に陸奥の國守伊達綱村再興せしをいふ。
【宮柱太しく】宮柱をいかめしく建て設けたるをいふ。



【彩椽】サイエン　いろへたるたるき。
【階】キザハシ　段階。
【九仞】一仞は八尺をいふ。
【朱の玉垣】アケタマガキ　あかきかみがき。
【道のはて】へんぴ。
【神靈あらたかに】神のみたまの靈驗いちじるしくしてなり。
【和泉三郎】名は忠衡秀衡の三子なり。
【寄進】キシン　寄附すること。
【俤】オモカゲ　すがた、やうす。
【ことふり】ことふるめかしの意。

【扶桑】 フサウ 日本の稱。
【洞庭】 ドウテイ 湖南岳州府にあり
【西湖】 湖南懷德府にあり。池中蓮と植う。
【欹つ】 ソバダツ 一端の少し高くなること。
【窅然】 エウゼン 深く遠き貌に云ふ。
【ちはやぶる】 枕詞なり。古事記に「道速振荒振國神」、又日本書記に、「殘賊强暴横惡神」とあり。これよりうつりて神の冠詞としたるにや
【大山づみ】 山の神なり。
【造化の天工】 自然のなせるたくみなるわざ。



【雲居禪師】 ウンゴゼンジ 攝津勝見寺に寓せり仙臺侯之れを迎て瑞巖寺居らしむ。
【松笠】 マツガサ 松毬とかく、まつふぐり、又轉じて「ほぐり」とも云ふ。
【入唐】 ニッタフ 唐國に遊學すること。
【德化】 トクゲ 德の感化力。
【七堂】 チヨウメ 山門佛殿法堂方丈食堂浴室東司を云ふ。

【佛土成就】 ブッドジャウジュ 極樂淨土が成り出づる。
【大伽藍】 ダイガラン 大なる僧舍。(寺)。
【あねはの松】 筑紫の松浦佐用姫の姉この地にて死す。里人その塚上に稚松を植うるを起原とすれども又小野小町の姉某の墓所なりともいへり。定かならず。陸前栗原郡姉葉にあり。
【緒だえの橋】 陸前志田郡古川町にあり小板橋なり。

【雉兎蒭蕘】 チトスウゲウ 獵師や木こり草刈。
【そことも分かず】(何れともはつきりせず)
【黄金花咲く云々】 聖武天皇の「天平二十一年二月陸奥國始貢黄金」とあり家持之を祝して歌へるなり
【廻船】 廻漕船なり。
【まどしき】 まづしき。
【袖のわたり】 陸前桃生郡にあり。
【尾ふぢの牧】 牧場なり北上郡にあり。

【まゝの菅原】 石の卷の束にあり。

【よそ目】 わき目にみる。（とほりがけに一寸見る）

【三代の榮耀】 三代の極めた豪奢の狀。

【一睡の中】 睡眠中の如くに人間のはかなきこと。

【義臣すぐつて云々】 義の爲に盡さんとせる人々の名だゝるものはこの城にたてこもつて戰死を遂げたが、是等の人々の功名もその時限りのものとなつて、後の世に誰れとぶらはんものもなく、今は叢となりはてゝなり。

【國破れて云々】 杜甫の詩に、「國破山河在、城春草木深、感時花濺淚、恨別鳥驚心。」云々とあるによりて書けるなり。

【夏草やの句】 泉の城の古戰場に來て見れば、夏草しげりて誰弔はんものもなけれども、昔は義に勇める人々の鬪爭の活劇を演じたる跡ぞかし。有爲轉變の世のはかなき此の如しと歎ぜるなり。



【二堂】 金堂、經堂をさす。

【千歲の紀念】 千歲の後に至るまでのおもひ出のたねとなるべきもの

【五月雨やの句】 五月雨時はなべて晝猶暗きものなるに、金堂のみは梅雨もふらでやあらんいと明しとなり。金堂の金色燦爛としてまばゆきさまを詠みたるなり。

## 一三、木枯

【木枯の句】 けさ起きいでゝ見れば波の音高くきこえる。はてはよべ木枯の風が吹いたとみえるわいの意。（木枯は暮秋より初冬にかけて吹く風にして、「はて」は怪み迷ひて、考へかへす時などに發する感詞なり。）

【あかつきやの句】 冬曉の空寒く海上に鯨の吼ゆるやうなうなりがきこゆるがあれはゆふべあらしのあつたためでもあらうかいの意。

【枯蘆の句】 冬枯の河ばたに來て見れば、日毎に蘆の葉が流れてゆく荒涼のさま想ふべしとなり。

【易水にの句】 河畔に來て見ると、葱を洗ふものがあると見えて葉先などがちらほら流れて來るが、川風寒き夕に定めて寒さにたえないことであらうとなり。

【應々との句】 雪ふれる夕、友許り訪ふて門を敲けば、室内にては返辭はする聲がきこえるが、頓と出て來ない。人の心も知らぬかしらんとなり。

【いざ行かんの句】 さても降るにも降つたる雪なるかな、いざ雪見に行かう。よしや雪に倒るゝともそれはその時の事じや。此の絶景に如何で内にばかり居られやうかの意なり。



## 一四、日野山の閑居

【六十（ムソヂ）の露消えがたにおよび云々】 はやわが年も六十路ばかりの、この世を去るに近づきたる時に臨みて此の晩年のわが住家をこゝに造りたりとなり。（露といひて末葉といへる露に緣ある詞を用ゐたるは用意の巧なる所なるべし。）

【旅人の一夜の宿云々】 旅人の一宿してすぐ立つが如く、偶家を造るといへども、年老いたれば永く住むべき見込もなきにとなり。

【老いたる蟲云々】 年老いて假住の庵を結びたるにたとへていへるなり。

【中頃のすみか】 大原山の住家をいへるなり。

【世の常ならず】 普通の家とはさまのかはれるを云ふ。

【方丈】 一丈四方の意。

【處を思ひ定めざる云々】 こゝと一所を思ひ定めておかねばなり。

【地を占めて作らず】 土地を定めて作らず何處なりとも思ふ所に作るとなり。

【土居（ドヰ）をくみ】 周圍の壁の如きものを造るなり。

【打覆（ウチオホヒ）をふき】 屋根をふくを云ふ。

【いくばくの煩（ツヅラヒ）】 どれほどの手數の意。

【用途】 入費のことなり。

【迹をかくし】 俗界を去りて蹤跡(サウセキ)をくらますとなり。

【日がくし】 庇(ヒサシ)の如きものを云ふ。

【すのこ】 簀(スノコ)にて竹にて造れる縁なり。

【閼伽棚】 アカダナ 佛に奉る水を入るべき器物などのする棚。

【落日を受けて云々】 夕日を畫像にうけて、眉間の光明とするとなり（阿彌陀如來は眉間に光明あり。その光明をもて國土を照すと云へる故事あるによりて云へるなるべし）。

【皮籠】 カハゴ 皮など張りたる箱やうのものにて、衣類などいるゝに用ゐる。

【三四合】 合(ガフ)はふたのある器物など數ふるに用ゐる語なり。

【管絃】 クワンゲン 笛と琴となり。

【往生要集】 アウジヤウエウシウ 源信僧都の著、念佛の業を本として、經論中の要文をあつめたるもの。

【抄物】 セウモツ 思ふふしぶしをかきぬきたるもの。

【折箏(オリゴト)つき琵琶】 共に用ゐる時には接ぎあはせて彈じ不用の時は折りたゝみて置くやうに作れるもの。

【厩のほど】 わらびの穗の長くのびたるもの。

【つかなみ】 わらをあみて作れる敷物。

【すびつ】 爐のたぐひをいふ。（ゐろりのことにて炭櫃の略なり）。

【よすが】 便宜の意。（たより）

【あばら】 あらくまばらなること。

【ひめ垣】 低く小さき垣。

【かけひ】 筧にて樋を云ふ。

【つま木】 小枝折りたる薪を云ふ。

【正木のかづら】 葉南天に似て黑みあり。冬の始に紅葉して美しきものなり。

【觀念(クワンネン)のたより云々】 西方に淨土あり。阿彌陀佛ありといへば、西方のはれたるは悟りの道を念ずるに便なりとなり。

【藤波】 フヂナミ ふぢの花なり。

【紫雲】 シウン むらさきの雲にて吉祥の時たなびく雲を云ふ。

【西方に匂ふ】 西方にたなびけるを云ふ。西方は淨土の地あればなるべし。

【かたらふごとに】 時鳥の鳴くを聞く毎に人世のはかなきを感じてその鳥の名に負ふ死出の山路に再會の時を契りて已れも遂に行かんとなり死出の山はゆきてかへらぬ所卽ち冥途のことなりとも、又死の苦難なるを山にたとへしなりとも云ひ、又時鳥は冥途の鳥なりと云へる佛說あるによつてかけるなるべし。)

【空蟬(ウツセミ)の世を云々】 現身の義にて現在世にある人の身をいふ詞なるが轉じて命、世、人などの名詞にかけて云ふ枕詞となれり。こゝは枕詞に用ゐると共に、空蟬の語をかねてひぐらしの鳴を悲むと聞かくり。

【罪障(ザイシヤウ)云々】 罪科ありて往生のさはりとなる心をいへるなり佛者は常に俗界にありて作れる罪障を消滅せんことをつとむるが故に、雪の



り消ゆるを罪障の消ゆるが如しと見たるなるべし。

【ものうく】 うるさし意。

【まめならざる時】 身の入らざる時なり。(まめは忠實、忠誠などの意なり。)

【無言(ムゴン)云々】 口は禍の門といひて、一切衆生禍口より生ず。口舌は身をうがつの斧なり。」といひて詞をつゝしむべきことを說けるをいふ。

【口業】 クゴウ 口にてなす罪業を云ふ。(獨居なればことさら佛戒を守りて無言なるにあらねども、おのづからこの戒をおかさずとなり。)

【境界】 四圍の事物を云ふ眼、鼻、耳、舌、身、意の接する處をいふの意。

【あとのしら浪云々】 吾が身のはかなく賴みなきことを白波の如しと思ひよせたる時にはなり。(拾遺集滿沙彌(マンサミ)の歌に「世の中をなにゝたとへん朝ぼらけ漕ぎゆく船のあとの白波」とあり。)

【岡のや】 宇治川の東岸なりといふ。

【満沙彌が風情をぬすみ】 満誓沙彌のことにて、尾張守左大辨正五位上笠朝臣麿のことなり。養老五年太上天皇の御病を祈り、剃髪得度したるなり。風情(フウゼイ)は樣子などゝ云ふ意にて、ぬすみはならふにて謙退の詞づかひなり。

【桂の風云々】 白樂天の琵琶行に、「潯陽江頭夜送レ客、楓葉荻花秋瑟瑟」。とありて、秋のころになりて吹く風の桂の葉をならす時などには、潯陽江のことなど思ひやりて琵琶を弄ぶとなり。

【源都督云々】 桂大納言經信卿のことなり。琵琶の妙手にして此の流を桂流といふ。都督は太宰帥の漢名なり。

【秋風の樂】 盤渉調の樂の名なり。

【流泉の曲】 流泉啄木とて共に琵琶の曲名なり。

【つばな】 淺茅の穂なり。

【岩なし】 松林巖石の地に生ずる灌木にして實を結ぶ味甘美なり。

【ぬかご】 山の芋の實を云ふ。

【すそわの田居】 山麓にある田を云ふ。

【ほぐみ】 稻の穂を組みあはせて作るもの、門にも倉にも神に奉るとて掛くるなりとぞ。

【羽束師】 山城乙訓郡にあり。

【あゆみわづらひなく云々】 足のつかれを覺えず行歩するになやみなきを云ふ。

【志遠くいたる】 心馳せ神ゆきて遠くあそばんとの念の生じたる時はなり。

【蟬丸翁が跡】 蟬丸は延喜の頃の人敦實親王の雜色なりといふ。琵琶の名手にして、逢阪の關のあたりに庵を結び、琵琶を彈ずるを以て樂としたりと云ふ。此人の處に墓參などして、香花を手向け回向するを云ふ。

【猿丸大夫】 攝津深草郷の人、近江曾束(ソツカ)山中にかくるゝ歌人なり。山背大兄王の第三子弓削王の別名な

りとも云ふ。

【家苞】 イヘツト　みやげと云ふことなり。

【眞木の島の云々】 山城宇治の西なる眞木といふ島に、網代を設けかゞり火をたきて魚を取る處あり。堀川百首に、「大井川ぜゞにひまなきかゞり火と見ゆるはすだく螢なりけり」とあるを思ひあはせるなるべし。

【折につけて】 四時の折々、花晨月夕、鳥の聲蟲の音見るものきくものことゝくなり。

【あからさま】 「かりそめに」なり。（暫時。）

【やむごとなき人】 貴人を云ふ。

【數ならぬたぐひ】 物の數にもならぬ人々のたぐひ。

【つくして云々】 盡く知ることは出來ないの意。

【炎上】 エンジヤウ　城郭殿舍など大なる建築物の燒くるを云ふ。



## 一五　死と永生

【釋迦】 釋迦牟尼を云ふ。佛法の敎祖なり。夙に現世の無常をいとひ、十九歳にして雪山に入り、苦行難行十年にして大悟するところありと云ふ。

【四苦】 生、老、病、死を云ふ。

【解脫】 ゲダツ　煩惱（ボンナウ）の累縛をとき、三界の業苦（ゴフク）を脫する義にして卽ち悟なり。

【宿罪】 前の世より身に受けたる罪。

【安心立命】 アンシンリツメイ　生死の眞理を悟りて、天命に安んずるを云ふ。

【道德】 吾人の行爲の達すべき目的、又は法則によりて、定れる行爲の踐むべき筋道を會得して行ふを云ふ。卽ち行爲の客觀的規範と、之れを行ふ品性の主觀的活きを意味するものなり。語をかへて云へば、善なる意志によりて善なる行爲を生ずるを云ふ。

【絕對】 何物にも制限せられず、又他に依ることもなく、肉果の關係

以外にある、即ちあらゆる事情を超絶して存在する、宇宙の根本實在を意味するなり。

【厭世】 世界は苦毒を以て充たされたるものにして人間の欲望は不滿足及び苦の感情より生ずる努力にして、人生はこれによつてて引きつゞき滿足の情態に到達するものにあらずとなし、現世を脱離して以て滿足を得べしとする主義。

【樂天】 世界は種々の不完全なるものありとするも、善良のものにして全體としては完全なり。又生存者に對しては幸福を享有せしむるものなりと主張する主義。

【超絶】 デフゼツ 群をこえてすぐるゝこと。

【涅槃】 ネハン 功德を圓滿にし、煩惱生死の雜染を滅盡し迷忘の情念を脱却して、眞理を證得したる無邊の作用ある妙體を云ふ。

【桑滄】 サウサウ 劉廷芝の詩に、「已見松柏摧爲レ薪、更聞桑田變爲レ海。」の句より來れるにて、世の變遷の甚しさを云へる語なり。

【蕩々】 タウタウ 廣大の貌。

【汩々】 ベキベキ 水流る貌、又波浪の聲なりともいふ。

【哲人】 叡智の人をいふ。

【傑士】 すぐれたひと。

## 一六 義士討入の模様を報ず

【社中】 文璘等一派の俳友の組織せる社を云へるにか。

【都文公】 土屋主税、都文公と號す。俳諧を好み風雅の嗜みあり、其角等と共に交る。邸は本所松坂町にあり吉良氏の邸に鄰接せり。

【忘年の一興】 年忘れのため、年末に催す會の事を云ふ。

【文臺】 ブンダイ 文机を云ふ机の小なるものにして書籍短冊などを載するに用ゐるもの。

【料紙】 レウシ 所用の料とする紙。

【夢のうき世云々】 うつら〳〵として、漸く夢の世界に入らんとせし間もあらせずとなり。

【けはしく門を叩く】 あら〳〵しく門を叩くとなり。

【浪人】 ラウニン 扶持にはなれ主家を去りたる士を云ふ。

【年來の遺恨】 淺野長矩、吉良義央の無禮を憤り、之れに切りつけしは元祿十四年三月十四日にして、長矩其罪を以て卽日死を賜ひ、領地を沒收せらるゝに至れり。長矩死に臨み、遺恨重る義央を一擊の下に殺し得ざりしを骨髓に徹する恨みなりといひて果てたり。之れをさせるなるべし。

【よしみ】 情誼。

【不覺】 フカク 不覺悟の略にて、失策なりの意。(根性のあさはかなることをいふ。)

【神妙】 けなげなり。殊勝なりなど云ふ意。

【生涯の名殘】 永遠の別れとなるべき別れての後に思出となるべき見おさめのすがた。

【わか雪との句】 こよひこそは年來の望をはたすべきことぞ思へばこれ程の雪は何のものかはとも云はん程の意なるべし。

【風颯々】 カゼサッサッ さあ〳〵と吹き來る風にさそはれて、女の叫童子の泣く聲などをきくとなり。

【本懷】 ホンクワイ 本望本意など云ふに同じ。

【穩便】 ヲンビン 「おだやかに」「かどだゝぬやうに」など云ふ意。

【日の恩やの句】 子葉の句なり。御厚意によつて忽ちの間に氷も碎き得て、年來の目的もとげえましたとなり。

【入魂】 ジッコン 懇意なりの意。

【伏劍に及び云々】 自刃するやうになつたならばとなり。

【追善】 ツキゼン 死者の忌日に供養すること。(追福。)

【文蹕】 秋田藩士梅津文右衛門のことなり。其角の俳友なりとぞ。

【月雪の句】 義士復讐の擧は武士として至極の面目にして、且又機宜を失はず。死して餘榮あるべし。當夜の光景、其の擧に對應し、一

段の光ありと云ふべしとて、夜景を取りて此の學を詩化せしなり。

## 一七、福澤先生を悼

むその一

【長嘯】 チヤウセウ 口をつぼめて長き音調の聲を出すをいふ。卽ち風月に吟じて氣樂に世をおくるを云ふなり。

【瞻望】 センバウ くびをのばしてあふぎのぞむこと。

【舌を鼓す】 舌を掉(フル)ふに同じ遊說すること。

【氣焰】 キエン 意氣を盛にすること。

【巨人】 偉人など云ふに同じ。

【師表】 シヘウ 人のてほんとなるべきものを云ふ語。

【愁眉を開く】 しかめたる眉を開くにて心配とけて安心することに用ゐる。

【啓發】 人の思想を開發すること。

大平民 先生の主義あくまで平民的にして、然も人物の大なるを以て云ひしなるべし。



【後進】 コウシン 後輩と云ふに同じ(後の世に立つもの)。

【優遊自適】 イウイウジテキ ゆつたりとして心の思ふところに從ふを云ふ。

【天愁にこの老を遺さず】 天は心にもあらざるべきに、しひて翁ほどの人物の命をうばひとつてしまつたとなり。

【白玉樓に徵し去る】 圓機活法に「李長吉將に死せんとす。夢に人の一版書を持するを見る、曰く天上の白玉樓成る、君を召して記を作らしむと。しばらくあつて氣絕す。」とあり。よつて文人の死を白玉樓中の人となるといふなり。長吉は唐の人なり。

【凌駕】 リヨウガ 人をしのぎてその上に立たんとする義。

【機緣】 キエン 衆主の根機に佛の敎を受くべき因緣の有ること。

【一轉機】 イツテンキ 本來の意義より轉ずべき機會。

【烱眼】 ケイガン あきらかなる眼。

【觀光】クワンクワウ　他國の光華を觀察するを云ふ。
【背馳】ハイチ　正反對となること。
【眼底】ガンテイ　まなこのそこ。
【推移】スヰイ　おしうつる。
【洞觀】ドウクワン　事物の末來又は根底をみぬくこと。

## 一八　福澤先生を悼　むその二

【鼓吹者】コスヰシヤ　鼓歌吹奏して心を發動せしむる意にして、或る事業を衆人に行はしめんとて力をつくして奬勵するを云ふ。
【逸居】イツキヨ　らくにくらすこと。
【鼓動】コドウ　はげましすゝむること。
【陶冶】タウヤ　陶の器を作り、冶の金を鑄るが如く、人材を育成するを云ふ。
【殘壘】ザンルヰ　半ばこはれのこりの舊思想のこと。
【月桂冠】桂の枝にて輪をつくり、これを頭上に戴くものにして、希



臘人の創始なり。紀元前五、六世頃に文學奬勵の爲めに設けしなり。
【常識】人各執る所の業務に於ける特殊なる知識技能の外に有すべき、健全なる一般的理[illegible]又は道義心を云ふ。
【薫陶】クンタウ　德を以て人を化するを云ふ。火の物を薫し、陶の器を造るが如く、人材を育成するなり。
【招牌】カンバン　看板。
【誘掖】イウエキ　前にありて導き、傍にありて扶くるを云ふ。
【天人冥合】テンジンメイガフ　天と人とが暗合するといふことにて、人間も一切の色相を除却すれば自然に天と合一するを云ふ。
【幽玄】イウゲン　おく深くして容易に探り知るべからざること。
【獨立自尊】他に屈服せず、依賴せず、束縛を受けず、支配を受けず以て自己の尊嚴を保つを云ふ。
【躬行】キウカウ　みづからおこなふ。
【汲々】キフキフ　一心を傾けてつと

ひること。

【軒冕を泥塗にす】 軒は大夫以上の車、冕は大夫以上の冠の稱なれば高位高官を見ること、泥塗に異に異らざるを云ふなり。

【拜金宗】 ハイキンシウ 金錢を絶對無上のものとたつとぶ一派。

【大和尚】 ダイワシャウ 道を傳へをしふる敎師の義。

【過渡の時機】 舊態を脫して、未だ新態成らざる途中の時代。

【髣髴】 ハウフツ 恰も似たりの意。

【荀卿の說によりて云々】 荀卿は孟子と同時代の人なり。儒學を學び性惡の說を唱へたり、李斯、荀卿に學びて秦の始皇に相として、刑名を以て天下を治むることをすゝめ、始皇崩して趙高と共に、暗愚なる二世皇帝を立て、後趙高と隙を生じて殺されたるなど、其の行ふ所儒家たる荀卿に似たる所なきを云ふ。

【形而上】 ケイジジャウ 物體をはなれての考察を云ふ。

【處士】 ショシ 民間にありて官途につかざる人。

【天爵】 官位なけれども、德高く自然に人に尊ばるること。

【藐視】 ベッシ 心にとめざる貌。(ばつとみる。)

【涵養】 カンヤウ 漸を追うて染み移るやうに養ふこと。

【堀川の實踐學派】 伊藤仁齋の學派を指す。

【懷疑】 クワイギ 哲學の一派にして認識を否定し、眞理を疑ひ、一々虛僞として看取する說。

【一貫の行逕】 一の主義を立てゝおし通すすぢみち。

【諄々】 ジュンジュン 詳細叮嚀に語りて倦まざる貌。

【典型】 型は模なり典は範なり。(てほん。)

## 一九、歡樂卿

【衰山盛山】 共に假作の名なり。

【甘雨】 人の望みたる時に降る雨。

【酷吏】 コクリ 苛酷なる刑罰を以て

下民を御する吏。

【賊民】 ゾクミン 國家をそこなふ民。

【莫逆】 バクギャク 相互の友情少しも衝突せずしていとしたしさを云ふ

【市賈】 シコ 商人なり。

【貳價】 ジカ 品物の價を二樣にすること、客をあざむかざるを云ふ。

【陰德】 ひそかに德をおさめ善をなすを云ふ。

【蠻貊】 バンバク 南方の蠻人と、北方の狄人とをさせるなり。



【連理】 他の木と枝と互につゞきたる木、聖代の瑞とす。

【內聖外王】 內に聖人の德を具へ、外に王者の治あるを云ふ。王者は德を以て民を治むるなり。

【理亂】 治亂と云ふに同じ。

【向へる膳云々】 賢者を延見するの情の切なるを云ふ。

【蠶飼】 コガヒ 養蠶のことなり。

【三司】 三公におなじ。太政大臣、左大臣、右大臣是なり。

【大晦日の修羅道】 シュラダウ 大晦日の債權者、債務者の狂奔するさまを云ふ。

【斷金の交】 至りて親密なるを云ふ。易に「二人同レ心其利斷レ金」とあるは、同心の力は如何なることをもなし遂げらるゝをいへるなり。

【壇那】 ダンナ 施主を云ふ。

【五節句】 ゴセック 人日(一月七日)上巳、(三月三日)端午、(五月五日)七夕、(七月七月)重陽、(九月九日)これなり。

## 二〇 丹波少將

【筆のすさび】 すさびは慰の意もとは進むる義にして、手すさび口すさびなどの例あり。(慰みに書いたものゝ意。)

【出家】 シュッケ 佛門に入るを云ふ。

【三尊來迎】 サンソンライゴウ 三尊は如來及び觀音勢至を云ふ。來迎は來現して極樂淨土に引接したまふを云ふ。

【九品住生】 クボンジャウ 九品は極樂往生の階級なり。生前信心の

如何によりて其差を生ず。往生は極樂に往いて生るゝ義なり。

【さすが】 大納言ともいはるゝものほどあつて。

【欣求淨土】 ゴングジャウド 淨土を願ひ求むる義、淨土は現世の苦多き穢土なるに對して清淨なる國土と云へるなり。

【かひ〳〵しく】、まめやかにの意なり。

【壇】 ダン 土を高くきづきたる處をいふ。

【遠き守云々】 流人とならせられたることをばなり。

【一日片時の命も云々】 一日片時の命もあらうとは思はれなかつたけれどもなり。

【露の命】 はかなき人の命となり。

【さすが】 まへのは「さはさりながら」と解すべく、後のは「なるほど」の意に解すべし。

【かきくどく】 切に繰り返して云ふ。

【生を隔つ】 現世と來世との隔なり。（幽明處を異にせるを云ふ。）



【山莊】 サンサウ 山にあるいほり。

【築地】 ツイヂ 周圍の墻壁を云ふ。

【おほひ】 屋根のことなり。

【興ぜし人】 ギョウ 成親をさす（興はなぐさみといはん料なり。）

【欄門】 ランモン すかし模樣のある門。

【蔀】 シトミ 風雨を防ぎ又は日除などに用ゐし戸のことなり。

【妻戸】 ツマド 板戸を兩開（リャウビラ）きになし得るやうに作れる戸にして、殿寢（デンシン）又は對屋（タイヤ）の四隅にあり。

【桃李不言云々】 桃李はものいはざれば、春は幾たび去つたかわからない。烟霞はきえてあとなければ、昔は誰がすんで居たかそれさへわからぬとなり。

【故里にの歌】 故里の花のものいふ世であるならばどんなにも昔のさまを問ふて見やうものをもの言はねばそれもならぬことよとなり。

【墨染（スミゾメ）の袖】 衣の袖を云ふ。

【心なし】 思ひやりの情がないといふこと。

【車の尻】 牛車の後をいふ。

【旅人が一村雨云々】 旅人がさつとふりくる村雨のとうりすぎる暫時の間、木蔭に雨やどりをするのてさへも、別るゝときは名殘のをしまるゝものなるぞとなり。

【一業所感】 イチゴフシヨカン 同じ善惡の業によりて、應報を得べき身なればとなり。

【先世の芳緣】 まへの世の因緣なり。

【ふるさとにの歌】 古里にかへつ見れば、荒廢に歸して居るてあらうと思つた軒も、板の間に苔がはえて思つたほどには月も洩らぬことじやとなり。

【籠居】 ロウキヨ 世をさけてこもりをる。

【寶物集】 ホウモツシフ 寶の事を論じて、佛法をたからとすることを記せるもの。

## 二一 比良の山風

【さくらさくの歌】 比良の山風がふくがまに〳〵、志賀の浦曲は湖上一面に落花を浮べて湖上は花になつてしまうよとなり。

【松かぜの歌】 玉川は攝津の玉川をさす。さて歌の意は、松風のおとのみをきくのてさへも秋の夜といふものはさびしいものであるのに、玉川の里にはきぬたうつ音さへ加はりて一段のあはれを感ずるとなり。

【さつまがたの歌】 さつまがたなる沖の小島卽ち硫黃島の内にわれありといふことを、幾重にもしげ〳〵よするしほ風の心あらば都の方へつたへくれよとなり。

【さよちどりの歌】 ふけひの浦は泉州にあり。さて歌の意は千鳥は此方の浦におとづれてないて居るのに、月はやあなたのゑじまの磯の方におちてゆくよとなり。

【吉野山の歌】 吉野山へは去年いつて見たが、そのときに又もの年に見んものと道しるべをしておいた

けれども、今年はおなじ路はたどらずして、外の路をもとめて、未だ見たことのない方面の花をたづねて見やうとなり。

【あふさかやの歌】 逢阪山にてはこずゑの花を吹きちらすが故に、關の杉村のあたりは、嵐までがかすみて見ゆるとなり。(落花をかすみに見たてたるなり。

【見わたせばの歌】 見わたして見れば花もなければ紅葉ない、何ものも目を慰むるものとてはない。たゞ徒らに浦の苫屋を秋風がものゝあはれをつげてふいて居るのみであるとなり。

【志賀浦やの歌】 水際の水がだんだん氷りつめてはるかのささまでも波が遠ざかりてゆくそのなみまより月もこぼりたる樣にいづるとなり。

【まれにくるの歌】 たまさかに來て一宿するさへも、松風のこゑをきいては、かなしく淋しきを、あはれわが妻は夜となくひるとなく地下にてたえずこの松風のこゑを聞くことなるか、さてはかなしく淋しからんとなり。

【初瀬山の歌】 はつせ山をゆふがたにこえんとて來れるに、こえぬさきに日のくれはてたれば、宿りやせんとおもへども、やどとるべきかたもなく、三輪の檜原のあたり秋風颯々として一段のあはれをそふとなり。

## 三三 落花の雪

【落花の雪に云々】 雪とまがふ落花に蹈み迷ひて、河内なる交野の春に櫻狩りをしたり、紅葉の錦を著て嵐山の夕暮の紅葉狩のかへるさに、一夜を旅の假寢にあかすばかりてさへもとなり。

【旅寢となれば云々】 旅の宿りかするとなれば物づらいものなるにまして愛情こまやかなるちぎり深き妻子をゆくささもさだかならぬに殘しおいてなり。

【今を限りとかへりみて】 再び帝都

にかへり來べくもあらねば、これぎりの別れなりとふりかへりて。

【うきをばとめぬ云々】 逢坂の關といふからには、往き來する人をせきとめておくべきに、このうき心にたへて出で立つ身をばとめやうともせざればその無情をうらみながら、こゝの清水に水むすびて涙に袖ぬらしながらなり。

【潮ならぬ海に云々】 海水ならば鹽くむあまに燒かれもしやうが、嶮水ならぬ水にさへもこがれながら、身を浮き舟の浪のまに〳〵浮沈をまかせて。

【世をうぬの野に云々】 憂と云ふことを名としたるからには、そこになく鶴も子をしたうてなけるにやと、我が子を戀ふる心にひきくらべてあはれであるぞ。

【鏡の山はありとても云々】 鏡の山と云ふからには、わが身もおいやしぬるとたちよつは見てゆかんものを、それさへ涙のために目もかすんでさだかにはみえぬとなり。

【物をおもへば云々】 心にもの思ひあれば忽老ゆとの傳說によつてかけるなり。

【いつかは身をば云々】 いつかは身のをはりともいふべきことばに緣のある尾張の國に來て熱田の社を伏し拜み、いまや恰も干潮になれるなるみがたに、傾く月の月あかりをたどりつゝ、明ぬくれぬと云ひながら行くさきは何處ならんと問ひつゝも、遠江の濱名の橋の夕しほに、ひき行く人もなくうちすてられたる小舟のやうに、終にはしづみはてゝしまふべき身であるからして。

【匹馬】 驛場の馬を云ふ。

【いばえ】 いなゝくなり。

【隙ゆく駒の足はやみ】 史記魏豹傳に、「人生二世間一、如二白駒一過二隙耳一」。とあるによれるなり。

【亭午】 ティゴ 纂要に、「日初出曰旭、日入曰晞、日溫曰煦、在午

曰レ亭、在レ未曰レ峡、日晩曰レ旰」とあり。正午を云ふ。

【院宣】 キンゼン 上皇の敕旨を云ふ。

【昔南陽縣菊水云々】 風俗通に、「南陽酈縣有ニ甘谷一、谷川水甘美、上有ニ大菊一、落レ水從レ山流下、得ニ其滋液一、谷中人家、飲ニ此水一、上壽百二三十、其中百餘歳、七八十歳爲レ大」。とあり昔南陽縣の菊の水は其下流をくんで、谷中の人皆よはひをのべたといへるが、今は東海道の菊川は同じ菊を名にして居りながら、其西岸にやどりて命ををへたとなり。

【古もかゝるためしの歌】 昔も此川の西岸で、光親卿がきられたと云ふためしを聞くからには、此菊川驛に來ては自分もおなじ運命に陷りて、身を菊川の水底にしづむるのてがなあらうぞとなり。

【大井川を過ぎ給へば】 大井川に來たまひては、都にもおなじ名の大堰川のあつて、或る時は後醍醐天皇の龜山御殿への行幸に御供をして、天子の御舟に陪乘し、詩歌管絃の宴に侍りし事もありしを、今は再び夢にさへ見ることのできないやうな身となつたつとおぼしめしたとなり。龍頭は龍頭にかたどりて舟首に附したるもの、鷁首は鷁といふ水鳥に象りたるを舟のへさきに附したる船なり。

【都にかへる夢をさへ云々】 清見潟をすぎゆけば、昔關所のありたる地なるを以て、關守のために都にかへることもゆるさるましければ、夢になりともみま欲しとおもへるに、よする潮路の波の音に夢さへ結びかねたれば、それさへかなはぬ身となりてなり。

【上なき思ひに云々】 憂愁の念にたへずしてのぼる煙のこのうへなき思をなしながらなり。

【下りたつ田子の云々】 源氏物語に、「袖ぬるゝこひぢとかつは知りながら下りたつ田子のみづからぞうさ」とありて田面に下りたつ農夫

の自らも、有爲轉變の世をめぐるてふ車をふみかへすなる車返の地に來てなり。

【袖にも波は云々】 袖にも波のこゆてふこゆるぎのいそをいそぐといふわけもなけれどもなり。

## 二三 故事二則

【塞翁】 塞上に近き地の翁といふ意なるべし。

【世をわたる便】 生計をたてゝ行く便宜。

【とぶらふ】 見舞におとづるゝこと。

【いづち】 何處なり。(何地。)

【あざみて】 あざけりてなり。

【つれなく】 心強く。(そしらぬ顔て。)

【さもある者】 相當役にたつものは。

【賢きためしに】 賢きしわざの例になり。

【よき人】 すぐれたる人。(賢き人。)

【毎事うごきなく云々】 何事も心のまよふこともなく、よく自重して、輕卒ならぬはなり。

【内外典】 ナイダテン 内外の經典と云ふ意。(内外は日本のも外國のもの意。)

【人の心をもつべき樣】 人の道德上心得とすべき樣と云ふこと。

【はかなくなりし】 此の世をさりしこと。

【遺文三十軸云々】 元稹の死にたる跡にのこれる著書三十卷は、ことゝく金玉のすれあふ聲の如き雅調のみてある。

【龍門原上土云々】 龍門原上の土は君の骨を埋めたけれども、君の名は千歲の後までも埋りはせぬとなり。龍門は黃河の上流にあり、河東郡に屬せり。

【交情鄭重相似云々】 二人の間の交情は、共に友誼心があつくして、金石の如くにかたくあつた。そして詩の風韻の高くして、整調のよきことは玉のすれあふ音もおよばないほどてある。

【阮家の南】晉書阮咸傳に、「咸字は仲容、與レ諸居二道南一、諸阮居二道北一。北阮富而南阮貧。七月七日、北阮盛晒二衣服一、皆錦綺粲レ目。咸以レ竿掛二大布犢鼻子庭一。或怪レ之。答曰未レ能レ免レ俗、聊復爾耳。」とあり。

【斷金伐木の契】（ダンキンバツモクノ）極めて親しき朋友の交をいふ。（金は至つて堅けれども、同心の利（ト）きときは能く之れをもたつべく。又詩經の伐木の歌を歌ひて饗宴して、相樂むが如しといへる語より出てたるなり。）

【口づく】言ひ慣るゝといふ意。

【友なし小舟】たゞひとりこぎゆく小舟をいふ。

## 二四　光頼卿參内

【公卿僉議】（クギヤウセンギ）公卿會議をいふ。

【過分】（クワブン）分をこえたりの意

【不參】（フサン）參内せざること。

【あざやかに】鮮をよめり。立派にさび〳〵しくなり。

【束帶】（ソクタイ）昔時正式の裝束の稱、冠、袍、石帶（セキタイ）、下襲（シタカサネ）、裾（キヨ）、表袴（ウハバカマ）、劍、笏、靴など殘らずとゝのひたる服裝を云ふ。

【おとなしやかに】上品の意。

【乳母子】（メノトゴ）わが乳母の子をいふ。

【腹卷】（ハラマキ）腹に卷きて背にて合す樣にしたるもの、鎧の一種。

【雜式】（ザツシキ）無位の役人にして雜役駈使の事をつとむ。

【自然の事】萬一の事あらばとなり

【清げなる雜色】美しき仲間といふこと。

【大軍陣】（ダイグンヂン）勢盛に行列を整ふるを云ふ。

【前高らかにおはせて】聲高に先拂をさせてなり。

【弓を平め云々】弓矢を伏せてなり。

【紫宸殿】南殿とも云ふ天子のおほやけの政を聞し召す殿なり。

【殿上】（デンジヤウ）清涼殿の南側の室にて、大臣以下殿上人の伺候する處なり。

【廻り】 公卿列座せるを行きめぐるなり。

【一座】 首席に座するを云ふ。

【上﨟】 ジヤウラウ 身分高き人。

【末座の宰相】 宰相は參議の唐名、定員八人あり。この八人中の末席なれば末座の宰相と云へるなり。

【しどけなう】 檢束なく亂雜なりの意。(取締なきこと。)

【色代】 シキダイ 顏色を正して會釋すること。

【むづと著く】 勢强く著席すること(力をこめて著座す。)

【居懸けられ】 信頼の袍の右の袖の上に乘りかけらるゝをいふ。

【あなあざまし】 さても見苦しの意。

【下重の尻云々】 下に重ねて著したる衣の垂れたる處、卽ち「裾」の曲れるを引きなほしてなり。

【衣紋繕ひ】 裝束の襟を正してなり。

【笏取り直し】 笏をもちなほしてとなり。束帶の時右の手に持つもの長さ一尺二寸幅二寸ありとぞ。

【氣色して】 氣色はんてなり。(面を正して色を改めてなり。)

【御諚ぞ】 御さたぞなり。

【ついたつて】 輕くちよつと立つてなり。

【惡しう參りて】 わるく來合せてなり。

【仕出したる事よ】 よくこそ振舞ひたれの意。

【聽したる體】 氣おくれしたる體裁

【壁に耳云々】 人もや聽く、もし信頼の耳にても入りたらんには、いかに叱責を受くるやも知れず、おそろしおそろしかゝる事はきくまじとなり。

【小蔀】 コシトミ 板戸の如くにして横に繁く打ちたるもの、主上殿上をみそなはす所なり。

【見參の板】 殿上の板敷にて、參内するものこゝにて名前を出す。謁見退出のときはふみならして知らしむるといふ。

【荒海の障子】 清涼殿東北隅の弘廂にあり。巖上に手長足長が組み合つて、荒海の魚を取らんとする所

のさまをゑがきたり。

【萩の戸】 清涼殿夜の御殿の北にあり。

【別當惟方】 檢非違使の別當惟方を云ふ。

【承り定めたる事もなし】 これと評定せられたところもなしとなり。

【有職】 イウソク 學問見識ある人の意。

【車の尻】 車の後乘をなせるを云ふ。

【以ての外云々】 甚だよろしからざることなりの意。

【他にことなる重職】 他の職とはかくべつおもき役なりとの意。

【先縱】 センシヤウ 先例。檢非違使別當の如き重職に居るものが、車の後乘するは先例にもなしとなり。

【天氣にて候ひし】 天子の御命にて是非もなしと赤面せしとなり。

【一議】 イチギ ひと意見といふ義。

【曩祖】 ノウソ 先祖。

【勸修寺内大臣】 藤原高藤を云ふ。

【承り行ふ事云々】 君命によりて行ひたることは、皆仁德ある政なりとなり。

【さしもどかる】 批難せらるゝとなり。

【口惜かるべし】 殘念なることてあらうぞよ。

【時刻をや廻すべき】 時間がかゝらうか忽ち滅亡すべしとなり。

【自然のことゝあらば】 萬一の事もあらばとなり。

【珍事】 チンジ 一大事。

【相構へて】 心を用ゐて。

【黑戸御所】 クロトノゴショ 清涼殿の北にあり。御賄所なり。

【一本御書所】 イッポンゴショドコロ 侍從所の南にあり。

【内侍所】 ナイシドコロ 三種神器中の御鏡を申すなり。

【溫明殿】 ウンメイデン 紫宸殿の東にあり。

【夜の御殿】 主上の寢御したまふ所

【朝餉】 アサガレヒ 朝夕の供御をさこしめす所。

【櫛形の穴】 清涼殿鬼の間の壁にある窓。

【影ろひ】 ほのかに影のうつる。
【かくこそござんなれ】 今はかくの仕末なりの意。
【のろ〳〵しげに】 いま〳〵しげにの意。
【すさまじげ】 興さむるさまになり
【許由】 堯の時代の賢人なり。堯の天下を讓らんといひしを聽きてけがらはしとて耳を潁川に洗ひたりと云ふ故事。
【上の衣】 袍のことなり。

## 二五 奈良朝の歌 平安朝の文

【萬葉集】 雄略天皇以後、淳仁天皇に至るまでの間の歌集なり。大伴家伴これを撰す。(橘諸兄敕を奉じて撰みたりとも云へり。)
【祝詞】 ノリト 神に申しあぐる詞。
【純文學】 文學を廣義に解すれば、人の思想感情を言語に表したるものにして、其中主として讀者の感情に訴へ、常識を以て理解し得らるべきを純文學といふおもに詩歌文章に關する學科を云ふ。
【膾炙】 クワイシャ 膾炙の人口にうまきが如く、人々の口に稱讃するを云ふ。孟子に、公孫丑の膾炙と羊棗と孰れが美きとかと問ひしに孟子答へて膾炙なるかなといひしによれり。
【津々】 シンシン 内部よりわき出づるを云ふ。
【韻文】 韻脚をふみて作爲するもの。
【散文】 詩歌の如く、平仄韻脚等なくして書きたる通常の文章を云ふ
【詩賦】 支那の韻文なり。詩は自然の景致、人生の曲折波瀾などを敍述したるものにして、平仄韻脚句法等あり。吟誦に適すべからしめたるもの。賦は上代は感興をそのまゝ述べたれども、漢以後には文章の一體をなし、句末に韻をふむやうになれり。
【脚色】 キヤクシヨク しぐみ。
【搢紳】 シンシン 貴族をさす。
【冗長】 ジヨウチヤウ くたゞしく

長きこと。

【簡朴】カンボク　簡潔にしてかざりなきこと。

【莊重】サウチヨウ　おごそかにおもゝしい。

【嫋々】デフデフ　よわくなびく貌。

【柔輭】ジウセン　なよ〳〵したること。

【隨筆】ズヰヒツ　筆のまに〳〵何くれとなく記錄したるもの。

【奇警】キケイ　きはめてするどくさときこと。



【右往左往】右へ往き左にゆき十分思ふがまゝにとなり。

【行事】ギヤウジ　朝廷の儀式佛事などの諸事を處理する事。

【本紀】ホンギ　紀傳體歷史にして、帝王一世の事を主とし記したるもの。

【紀傳體】キデンタイ　歷史の一體にして、記傳の體裁によりて、本紀列傳等、其人の傳を記列すること。

修訂中等國語讀本卷八　終

明治四十五年五月十五日印刷
明治四十五年六月二日發行

正價金二十錢

國語研究會編

編纂兼發行者　東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地　西村寅次郎
印刷者　東京市京橋區八丁堀仲町十番地　遠藤銓吉
印刷所　東京市京橋區八丁堀仲町十番地　六合舍
發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目　東雲堂書店
電話京橋一六三九番　振替口座五六一四番

不許複製

270
212